

第 8 卷

# 成 者

SEIJU

1987

冬 習



横浜 善光寺刊

拜啓 向寒の砂愈々占領の多くなる  
成嘉<sup>1</sup> 第八号をお送りいたします

皆様の御力に成る留学増派途の大事  
業も今も國際的の奨励と受けざるを得  
ない 十二月上旬パリを開かれる第1回  
日仏セミナーで本壇一休の南米遊學を  
発表するものによる要請と受け目下  
その地に應じる準備を進めております  
次号で詳細の報告をきるものと存じます  
とらあをまずお知らせと仰せと申す存  
時市病状身お大切に願ひ申し上げます

今冬

昭和二十一年十一月五日

善光寺住持 黒田武志

(天國)

檀徒の皆様

仏陀 (きとれるもの)

きとれる人は

すべてに勝ち

ふたたび他に敗らるるなし

この世 誰が

彼の勝利に及ばん

彼の心境は廓くして涯なし

彼には足跡もなければ

いかなる道によりてか

その人をまよわしえん

# 成者

SEIJU

1987 冬 習





善光寺藏



日本民芸館蔵

## 初期大津絵「不動明王」・「地藏菩薩」

大津絵は、江戸時代、近江の大津追分宿あたりで、街道を往来する旅人に売られた安価な民画で、寛永年間（十七世紀）に仏絵師による天神、戎大黒、青面金剛、阿弥陀佛などの神仏画にはじまるとされます。

元禄に入つて藤娘、若衆、太夫、槍持奴などの風俗画や、鬼の念仏、提灯釣鐘、座頭など世俗風刺の画題が現われ、徳目、俗信など様式の変遷を経ながらも描き続けられ幕末に到つてその歴史を閉じました。

いずれも無名の画工達による量産の作品ですが、数をこなすが故の速筆、簡素、練達の筆は、単純明快な描写に各々の画題の性格を描ききつて活き々きとした生命を宿しています。

ここに掲げました不動明王、地藏菩薩は共に初期大津絵神仏画を代表する作品です。火焰を背に破邪の剣を手に立つ不動尊の忿怒の姿、衆生済度の地藏尊の慈悲の姿を古拙の筆、簡素の彩色で表わしながら深く心を打つものがあるのは往時の人々の信仰の力によるものでありましょう。



善光寺藏



## 大業、檀越の信心によつて成就す

本誌「成寿」が世に出て丸四年を経過し、いま第八号の発刊となりました。この間、各号を通じて、留学僧の海外派遣に関する記事を主要な内容としてきました。この留学僧派遣は一寺院の事業としては他に類例を見ることのできない画期的な快挙として、国内はもとより、最近では国外からも注目されてまいりました。現に、十一月八日、パリで開かれる国際シンポジウムに出席して発表することの要請を受けているような次第であります。

太祖瑩山たからせういざんぜんじ禪師は「河谷山かうくさん尽未来際じんみらいさい置文おきぶみ」の中に、

仏のたまわく、「篤信とくしんの檀越だんごつ（注 檀家のこと）、これを得る時は、仏法断絶だんぜつせむせむニ云々」と。また云く、「檀那だんな（注 檀家のこと）を敬ふこと、仏のじつじくすべし、戒かい、定じやう、慧え、解げ、みな檀那の力に依て、成就じゆじゆす云々」と。

然る間、瑩山いざん今生の仏法修行は、この檀越の信心に依て成就す……

と述べておられますが、太祖様のお言葉によれば、私の今生の仏法修行、善光寺海外留学僧派遣の大業は、正に「この檀越の信心に依て成就す」と申すべく、ただただ感謝のほかなく、「檀那を敬ふこと、仏のごとくすべし」と肝に銘じ、「篤信の檀越、これを得る時は、仏法断絶せざる」ことを確信するものであります。

さて、善光寺海外留学僧派遣事業は、国内的には一応、運営の態勢が整いましたので、今年を受入先の協力態勢整備に努力して来ました。すなわち、三月にはインドに、六月にはニューヨークの禅マウンテン・センターに、そして九月にはタイ困ワットパクナムに、それぞれ足を運び、挨拶と今後の協力をお願いして参りました。

さいわい受入先はいずれも好意的協力的でしたので、大いに意を強うして帰りましたし、海外生活を通して、広く世界に活眼を開く人材の育成の重要性をいよいよ強く感じております。今後一層の精進を傾注する所存ですので、檀信徒の皆様には倍旧の御協力御支援をお願いする次第であります。

■アメリカ■

ニューヨーク マウンテン センター



MAIN ENTRANCE  
ADMINISTRATIVE OFFICE  
MEDITATION HALL



般若經疏

卷之三

觀世音菩薩普門品

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏

法華經疏



諸佛無假若汝能空身  
 得阿耨多羅三藐三菩提  
 教者無若汝能空身  
 神呪是大明咒是無上咒  
 是無等等咒能除一切苦  
 實不虛也汝能空身  
 多更即受此咒能除一切  
 汝能空身能除一切苦  
 汝能空身能除一切苦

衆生無心皆在汝身  
 汝能空身能除一切苦  
 汝能空身能除一切苦

十有八世二已傳  
 汝能空身能除一切苦

汝能空身能除一切苦  
 汝能空身能除一切苦  
 汝能空身能除一切苦

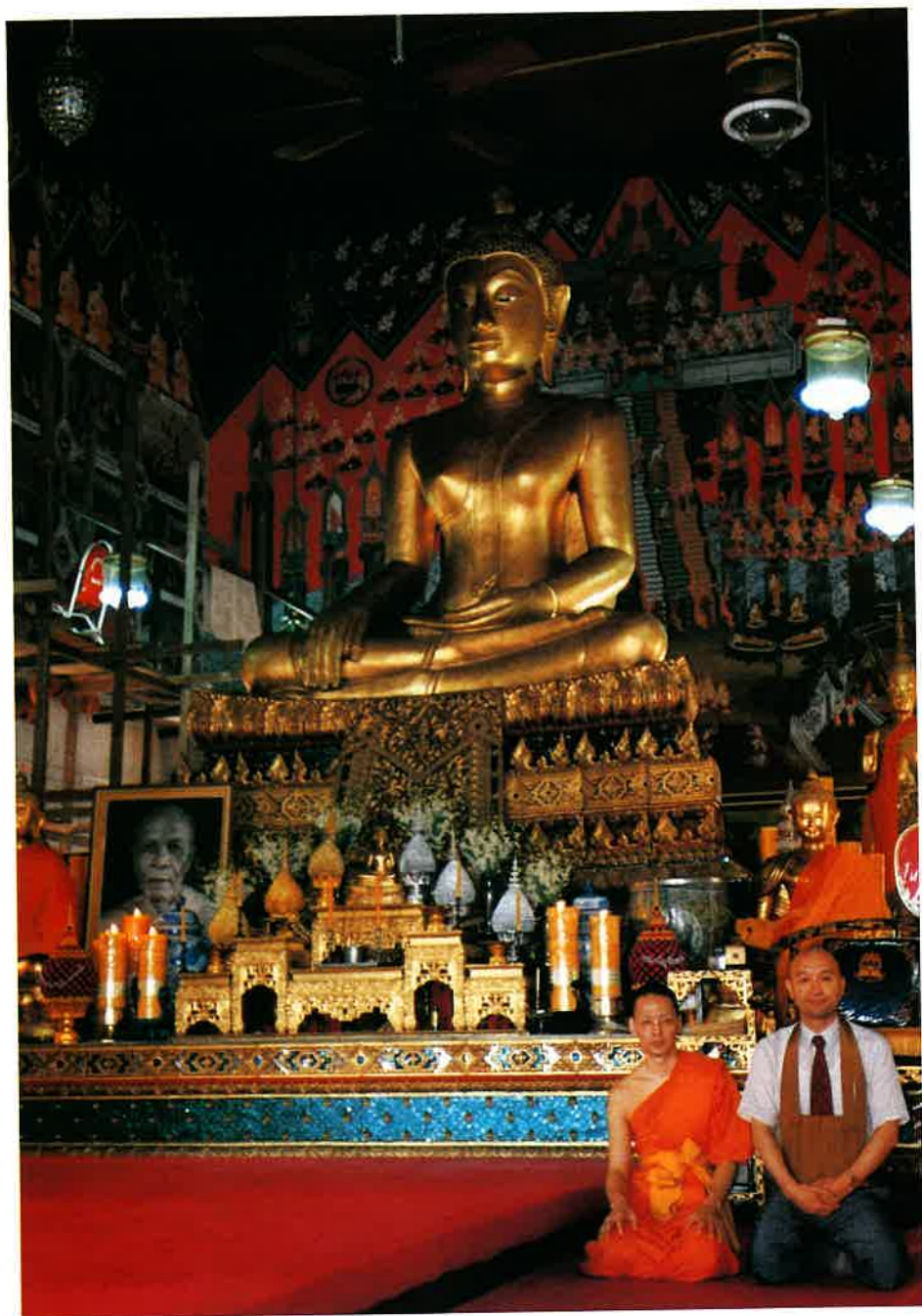


【タイ】

# ワット・パクナムに 留学僧を激励



右より二人目 浦田智司師、パクナム副住職、当山住職、倫子夫人。







# 大いなる合掌

赤間義徳

蓮華のつぼみは

花びらを合わせて

宮沢賢治の言葉を 唱えている

「世界がぜんたい幸福にならないうちは  
個人の幸福はありえない」

坐禅

仏陀のお悟りに肉迫する

求心

海外留学僧派遣



仏陀のみ教えを世界に弘める

遠心

求心

と

遠心

そのままです　まるごと

一つになる

ひたむきな合掌

世界ぜんたいの幸福を願って

世界を包容する

黒田大圓方丈様の

大いなる合掌！

■ 美術シリーズ ■

# 大津絵



日本民芸館蔵

仏陀(さごれるもの)

巻頭言

黒田 武志

4

■ ニューヨーク・マウンテンセンター

6

■ タイ留学僧激励

赤間 義徳

10

カラー

■ 詩

大いなる合掌

佐々木潤光

12

■ 美術シリーズ

大津絵

鎌田 茂雄

14

特別寄稿 ■ 禅について

黒田武志(大圓)

18

法 話 ■ お釈迦さまの成道

遠藤 太禅

21

講 演 ■ ふるさとへ還るおみやげ

阿部 慈園

26

留学記 (その3) ■ 恩師ババット先生のこと

保坂 俊司

38

■ 日本人のインド理解の盲点

東 隆真

42

座談会 ■ 海外留学僧第二回総会

安井 隆同

48

エッセイ ■ 禅と衣食住(四) 粥

早田 啓子

64

論 文 ■ ある日の佛蹟行脚の旅

島崎 義孝

71

■ 未来社会の仏教と私

島崎 義孝

76

レポート ■ アメリカ禅仏教のこと覚え書き

島崎 義孝

80

善光寺なまの

島崎 義孝

112

師者の懐かし

島崎 義孝

116

PREFACE

島崎 義孝

121

題字・グラフィック・さし絵 伊藤三喜庵

カット 古刷仏集より

# 禪 につ いて

東京大学教授 鎌田茂雄



昭和三三年四月、東京大学東洋文化研究所の助手になって以来、現在まで約三十年の間、華嚴教学と、中国・朝鮮仏教史の研究に没頭したため、専門道場で参禪する時間もないままに過してしまっただが、青年時代に学んだ禪についての思い出や、出会いを今も忘れることができない。

昭和二十年十月、敗戦によって虚脱状態に落ち入った私は、ある日、鎌倉の円覚寺を訪ねた。円覚寺の山内の白雲庵には、私の母の墓所があ

つたからである。母は昭和十二年にすでに亡くなっていた。湘南中学から東京陸軍幼年学校へ入った私は、休暇になると、よく白雲庵に墓参りに行ったものである。

白雲庵は円覚寺の塔頭たっちゅう寺院であり、開山は南宋の人で、中国の曹洞宗宏智派わんしの法系を受けた東明恵日とうみやうえにちであった。

円覚寺へ行って朝比奈宗源老師の講話を聞いたりするうちに、次第に禪に関心を抱くようになった。時には参禪のまねごとをしたりした。

円覚寺の僧堂は舍利殿の右側にある。臘ろう八接はつせつ心しん（十二月八日の釈尊の成道を記念し、十二月一日から八日の朝まで昼夜寝ずに坐禅する行事）の時など、坐禅堂の窓は全部開けられ、寒風が吹きすさぶ。じつと坐ついても全身が冷えきってくる。休憩時に出された甘酒の味を今も忘れることができない。

青年時代、不安定な精神生活をしていたとき、

私の前に大きく立ち上がったのが、駒沢大学の坐禅の教授であった沢木興道老師であった。

この沢木老師の坐禅の授業は私にとって唯一ただつの救いとなった。何によって生きようか、と思いつめていた私にとって、これは一条の光明であった。

沢木老師は私の顔を見ると、お前の顔には狐がついていると言われた。当時、私は気狂いのように坐禅をしたり、時には山の中で線香に火をつけ、暗闇の中で光りの一点を凝視しながら夜坐をしたりしていた。いわば禪病にかかっていたのであろう。

駒沢大学の坐禅堂で坐禅をしていたとき、いきなり老師が単からおりてこられ、私の背後に立たれ、私の肩をもつて、私の身体を床の上どころがしたことがあった。仕方がないので床の上で坐禅を続けたことがある。老師は私の背中に立ちのぼる野狐禪やこぜん（真実に大悟徹底もしない

のに、みだりに奇異な言行をなす者を見下げて、野狐にたとえる)の亡霊を見たにちがいない。

私と沢木老師との出会いは学生時代、坐禅の授業を受けたただけであり、個人的に師事したり、教えを受けたことはまったくない。ただの門外漢の一人であるにすぎないが、青年時代の私が確信し、今もその確信が微動だにもしないのは、沢木老師こそ真実の禪者であるということである。

沢木老師は「坐禅はあたかも、武士が三尺の

秋水を引き抜いて身構えていると同様に真剣な姿である。これ以上、真剣な姿勢はあり得ない。どんな人間でも、一ばん尊いのは、その人が真剣になったときの姿である」(酒井得元老師『沢木興道聞き書き』)と言われたが、禪とは、その人が真剣になってこの与えられた人生を生きぬくことなのである。私も還暦を迎えるにあたって、青年時代に学ばせて頂いた禅の生命を、氣持を新たにしてかみしめながら、合氣道の稽古と学問への精進に励みたいと念願している。



# お釈迦さまの成道（悟り）

住職 黒田 武志

十二月八日は「成道会<sup>じょうどうえ</sup>」と申しまして、お釈迦さまがお悟りをひらかれたことを祝福し、そのご偉徳にすがって、更に精進を新たにしようとする日であります。

カピラ城を出離して沙門<sup>しゃもん</sup>となったお釈迦さまは、マカダ国の首都・ラージャ・グリハに師を求められました。

当時、コーサラ国と並ぶこの富強な国は、新しい思想家たちの集まるところでもあったのです。パンタヴァア山に籠って修行を始められたお釈迦さまは、仙人といわれた代表的な思想家たちを次々に訪ね、そしてことごとく絶望されて

やがてウルヴエーラを目指します。

悟りを開かれる前のお釈迦さまの苦行というもの、すさまじいものでした。

当時のインドにおいては、苦行と瞑想<sup>めいそう</sup>が、悟りへの唯一の方法と考えられておりましたから、お釈迦さまもまた、老・病・死の苦しみや別離、愛憎の苦悩<sup>あいきん</sup>のない安心の世界を求めて、孤独で苛烈な修行に励まれたのであります。

一日に一粒の米と麻の実だけで過ごす絶食の行。灼熱に耐える行。呼吸をとめる行……。肉体からの解脱を求めて、あらゆる苦行をなさいました。その姿は、苦行を共にした五人の修行僧たちを驚嘆させ、深い尊敬の念を抱かせました。



しかし、息も絶え絶えの苦行の果てに、お釈迦さまは、いたずらに肉体を責めても何の悟りも得られないことに気がつかれて、当時絶対的な手段とされていた苦行に、決然と終止符を打たれたのでした。

のちにお釈迦さまが説かれた「中道」は、仏教の中心的な教えのひとつでありますが、それはこの時の苦行の経験が基盤となつていると考えてもいいのではないだろうか。

「いたずらに肉体を苦しめることはかえって悟りへの阻さまたげとなる。肉体に執着もせず、また苦しめることもない中道こそ、悟りへの道である」と、お釈迦さまは私たちに教えてくださっています。

しかし、たとえ捨てたとはいえ、六年間を費された厳しい苦行は、お釈迦さまの偉大な意志力を支える力になっておりました。苦行するお釈迦さまは、ひとりの人間として、ひとりの求



道者として、その孤独なお姿に、激しいなつかしさを感じてなりません。なぜなら、その時のお釈迦さまは、私たちと同じように、人間ゴータマ・シツダルタとして自らの救いを得んがために苦悩しておられていたからです。仏陀と知られてからの、私たちへの普き大悲心への慕わしさとはちがって、人間としての深い孤独と苦しみが、私たちの心を揺さぶります。

苦行を捨てたお釈迦さまは、ウルヴェーラ村のセーナー部落、尼連禪河のほとり、スジャータという村の娘から、乳粥ちちかゆの施しを受けて、体力を回復されたといわれています。この様子を見た五人の仲間の修行僧は、「ゴータマは墮落した。」と絶望して、お釈迦さまを捨てて立ち去って行きました。

ひとりになったお釈迦さまは、尼連禪河で沐浴して身を清め、かたわらの大きな菩提樹の下に結跏趺坐けっかふざ（古代インドに伝わる坐法で、現在

禪宗で行う坐禪の姿でもあります。両足のうらを上向きに両ももの上にのせて坐ります。）して禪定ぜんじやうに入られました。

私たちが今「菩提樹」と呼んでいる樹は、もともとはピッパラ樹といっておったそうですが、お釈迦さまがその樹の下で菩提を成就されたので「ボーディールツカ（菩提樹）」と名づけられたといわれます。

またこの時、一人の草刈人が、お釈迦さまが坐られる岩の上に、吉祥草という大変貴重な草を、敷物の替わりにと布施したということです。そしていよいよ、大悟のときがやってきました。

十二月八日。夜が明けきろうとする空に、暁あけの明星めいせいがきらめきました。その時、お釈迦さまは豁然として大悟たいごされたのです。その大悟とはどのようなものであったのでしょうか。

……

万法（すべての存在）はいつもそのあるがままの相をあからさまに露呈している。これがあるがままに見ることができないのは、人間のまなこが迷いや苦しみ、妄執に覆われているがため、存在それ自体が覆われてあるのではない。ならば、諸法の実相に直かに触れるためには、人間のがわに張りめぐらされた覆いを取り払えばよい。

このようにして、お釈迦さまのまえに、万法がことごとくそのあるがままの相を開いてみせたのであります。

私たち禪宗においては只管打坐しかんたざということが重要視されますが、これは、ただひたすらに坐して、身心脱落しんじんたつらく、すなわち、迷妄、愛憎（執着）、先入観、それらをすべて脱落させて自己をあきらかにしようとするもので、お釈迦さまの大悟に至ろうとするいとなみでもあります。

ともあれ、お釈迦さまはこの大悟ののち、長い思索の時を持たれ、自ら悟られた法をひとりでも多くの人々に説き伝えようと決意なさいました。

私たちは、お釈迦さまが迷える衆生に法を説こうと決意なされたことに、心から感謝しなければなりません。

自らの悟りを得るためであれば、お釈迦さまは、大悟の歓喜と法悦のうちに一生涯を終えられてもよかったです。しかし、六道の苦界に沈み、無明むみょうの中で流転をつづける人々をみつめて、大悲の涙を流されました。この人々を救いたい、ところがお釈迦さまが悟られた法はあまりにも高遠で、衆生の知恵はあまりにも低すぎるのです。大変困難な作業であります。どのようにして法を説くべきかと、長い間苦しまれたに違いありません。

お釈迦さまは、法悦を自分おひとりものものと

THE Museum  
in Lahore  
Fasting Badaha



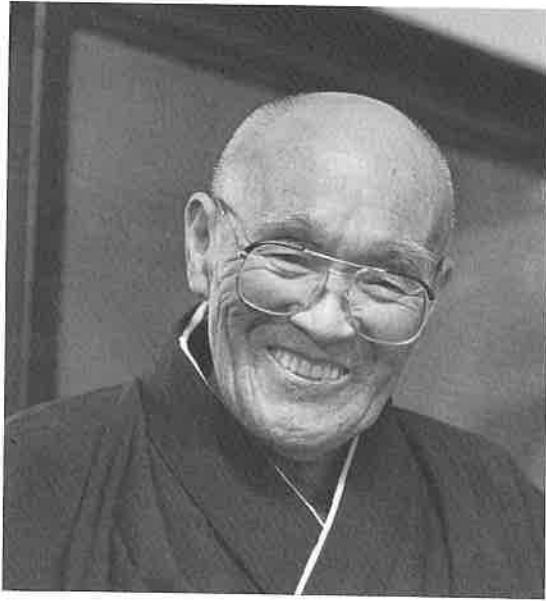
なさらず、それがいかに困難であったか。にもかかわらず私たちが有情に残さず分け与えようとなさったのです。このことに、私たちはいまあらためて感謝したいと思うのです。

お釈迦さまは、大悟と同時に抱かれた大悲心<sup>だいひしん</sup>によって、人間にただひとりの例外もなく仏性を認め、救済の可能性を見出されました。

私たちはその大悲心にすがって、より多くのお釈迦さまの言葉を聞き、安心<sup>あんじん</sup>の世界に導かれてゆきたいと思えます。

「おこたらず励むように」というお釈迦さまの最後の言葉を全うすることこそ、大悲心に報いる唯一の方法であろうかと思えます。

# ふるさとへ還るおみやげ



遠藤 太 禅

福島県西隆寺住職

奥会津の山の寺から出て参りました。

趣味と云うわけではございませんが、私はよく観音様の写佛を致します。今年は正月から不動様を描いて居りますが、不動様らしい不動様が描けないでおりました。この度靈験れいげんあらたな不動様の善光寺様へ参る事が出来たのは何かの因縁かと存じます。

不動様は皆さん御存知の如く頭上に八葉の蓮華を頂いて居ます。特徴ある口に牙を出し、右手に剣を持ち、左手に索つなを握にぎって磐石ばんじやくの上うへに坐し、または立ち、後に火焰を背負せおっておられる。この利剣で煩惱の悪魔を切り、索は迷いの道に

ふみ込む人々を縛つても引きもどし、そうした人々を救おうとする柔剛二段がまえの姿で究極の大慈悲の姿であります。

人は皆善行をすれば成仏する筈でありますのに、死後の後生を願う為に佛を礼拝するようになってしまいました。



不動様ははじめから今日迄現世祈禱の第一位となっております。

背負っている火焰は、不動様の烈しい慈悲の心の現れでございませう。

親が子供を叱るのでも決して憎くて叱るのでなく、心の中で泣いて叱っているんです。不動

様は恐ろしい御顔と姿をしておられますが御心の中で泣いているに違いありません。

会津に三コロリ観音様がございます。その三ヶ所の観音に祈るとコロリと死ぬると云うのでお年寄りの参拝が絶えません。

私の寺の境内に三十三体の乙女観音が立って居りまして沢山の方が参ります。ある日遠くから来たと云う老婦人が一体一体丁寧に参拝しました。帰りに寺に寄った折お茶を出しながら「おばあちゃん、随分丁寧に参りされたけれど何を祈られましたか？」と尋ねると

「勿論コロリと死なして下さいと祈りました」と当然の如き様子でした。

「悲しい事をお祈りしたんですね。私達は生きています。何時来るか知れない死の事など考えないで、生きています。うちは真剣に生きています。死ぬなんて余計な事を考えないで、生きることは働く事、今日一日しっかりと自分を

働かせる事です。

コロツと死にたいなんて取り越し苦労なんて止しましょうよ。」

老婦人は妙な顔してました。

「私はね観音様を拝む時、合掌してお姿に向い、目をつぶらないでしっかりお目を見るのです。目をつぶると雑念や慾念が湧いて来るから自分の目と観音様の御目と真直に釣り合わせるんです、真直に釣り合わせるから、これを祭りと言っておるんです。お祭りとは神さまと私が真直に釣り合う事なんです。」

観音様を見ていると「何と美しくやさしいお顔だろう」と思う。今にも泣き出しそうにそれをじっとこらえてかすかな微笑をして居られる。働<sup>ドウガク</sup>哭寸前の微笑と言って居りますが観音様のはかり知れぬ慈悲心が身体に感ずる迄じっと見つめるんです。

観音を見つめて感じた想いは私の心の底の底



で、同じ思いがあるからそう感ずるんです。

美しさもやさしさも慟哭寸前の微笑も私の心の奥底に、もう一人の私として存在していたんです。観音様をじっと見上げるとそんな素直な気持になれるのです。

観音と同じ心が私の中に息づいていたのです。お姿を拝む事はお姿を鏡として私の中の観音の姿を写してくださることです。

私は観音様にこう祈ります。

観音様。私が年老いてどんな死ざまをするかわからないけれど娘や嫁達にこう言いたい、

「その時はどうかよろしく頼むからなあ」と素直に言える様な、その素直な心を私に下さいと祈ります。」

そう言うとき老婦人は出されたお茶を呑みもしないで下を向いたま、しばらくじっとして動かなかった。夕暮は急に暗くなりはじめた。

やがて顔を上げるとボソリと言ったんです。



「何んて私は頑固者だったでしょう。嫁や他人の厄介になるもんか、自分の事は自分ですると言う頑固者でした。観音様におわびして帰ります」と云うと急ぎ帰り仕度をして暗くなつたのに三十三の観音様一体一体おわびする様に頭を下げ合掌したのです。私はそのうしろ姿を見て、何て素直なんだろう、この姿こそ観世音菩薩だと合掌して見送りました。

み佛を拜むと云う時に目をつぶってはいけないものです。じつと御目を見て、み佛の中に自分を投げ込んでしまうと、み佛は私の中に入つて来て下さるんです。お経の文の中に入我々入と云つて居りますが祈りとはこの入我々入だと思ひます。

多くの人が神様佛様を拜む時、目を閉じて御利益を沢山並べてこうして欲しいあゝして欲しいと祈るけれども、私達が合掌して拜む前に諸佛諸菩薩は合掌して私達を先に拜んでいてくれ

ておるんです。そうしてこう言つておられます。

「私が今拜んでいる貴方よ、貴方の中にピカリと光るものを拜んでいるのです。それが本当の貴方であり貴方が観世音菩薩であります。早くその事に気付いておくれ。貴方の中の観音様には無限の力がある事に気付いておくれ」と、そう言つて居られるのです。

自分が佛様方に拜まれて居る事を知つた時、何と勿体ない事だろうと、言いしれぬ勇氣が湧き出してくるのです。

私は非常に汗かきです。だから遠くに行く時はハンカチを三四枚は用意するんですが、七月の末、遠くの町にお話に行つた時に忘れて一枚しか持つて行きませんでした。汽車の中から汗を拭き、会場で一時間半お話をして控室に帰つたら、お手伝していた奥さんが来て、

「先生、そのハンカチ借して下さい。サツと洗つて来ます」と云うので渡したら、三分もた、

ないうちにきれいにアイロンまでかけて持って来てくれました。

「奥さん、きれいだね。どうしてきれいなんです？」ときくと、「洗たくしたから」という。

「洗たくするとどうしてきれいなんです？」

「汗やごみやほこりが全部落ちてしまったからでしょう」

「くだいようだけれど汗や塵やほこりが落ちてしまうとなんで美しいんでしょう」

奥さんは妙な顔して笑い乍ら去りました。

汗やごみやほこりが洗い流されたらハンカチはたゞのハンカチになったんです。私達は汗やごみほこり、そのほかにももっと色んなものを心の中に一杯つめ込んで居ます。せめてお寺へ参る時や話をきく時は、心の中の沢山の荷物をすっきり捨て、ただの私になりたいものですね。

たゞの私って非常に美しいものです。唯の私

になった時人間としての純粋性、即ち素直さが出て美しくなるんじゃないだろうか？ 余りにも沢山の荷物を背負ってうんうんうなり乍ら歩くなんて馬鹿げています。

禅宗の坐禅などは心の中からあらゆるものを捨てる事なんです、人間だからいろいろな欲を持つています。しかし慾にも大慾と少慾があります。

佛教は慾を捨てる事だと思つてますが慾がなかつたら死ぬしかありません。そんな事をお釈迦様は決して言われなかつた。

人間には五慾と云つて大別して五つの慾があり、それで三毒と云うむさぼりといかりとおろかさが現れて、自分だけでなく周囲まで暗くします。

どうしても自分を中心として、慾は果てしなくとめどなく広がり、他の事を考えられなくなり、混乱と不平不満、嫉妬、恐怖と苦をまき散

らします。

大体私達はまことに豊富に大自然から与えられております。無限といえる程豊に与えられている事に気がつかないでけち臭い小慾に夢中になって不幸を自ら造っているのです。

生きる上で最も大切な空気もどんな科学者でも造る事の出来ない水。水や空気に感謝する事などほとんど知らないで粗末にし汚染しきたなくしている現代です。

お釈迦様は慾を起すなとは言われない。慾もほどほどにと言われているのです。そうでなくとも私たちは必要なものは必要な時に必要なだけ存分に与えられているのです。水も空気も財宝も必要以上に与えられたら苦痛になるだけです。

しかし私達には願望があります。佛教は必要な願望を成就させる為に、大虚空を蔵として欲するもの好ましきものを与えてくれる虚空蔵菩薩

薩がおられるわけです。

凡夫の私達は小慾にふりまわされて居りますが、世界中で一番大きな慾を持った人がお釈迦様ではなかったでしょうか。

生老病死の四苦を四樂に変え、人間として最高の悦びの生き方の根本的原理を悟られて、御入滅になる八十歳迄旅して歩いて、現在の人は勿論未来永久に生れて来る人間に最高の幸福な生き方を伝えたいと云う大慾を起されたのであります。これ程大きな慾はないでしょう。

自分中心の慾はどんなに大きくても苦惱の種類になる小慾でしかありません。

自分中心のケチ臭い小慾をみんなの為に自分を思い切つて広げて、その上に立つ願望を持つ事によって成就するのです。

物に法則や定理があると同じく、心にも法則定理が頑と存在しております。

法則の外側に出る事は出来ません。

心はコロコロ変化するから転げるのをコロコロ  
と言うのかしれません。



心の法則とは、心に思ったものは実現する、  
心で認めたものは実現すると云う法則です。



それが為に心の内からもよおしたものをすぐ行動化する。それを断行する勇氣を持つ事です。

心に認めたものが深く潜在意識に刻み込まれて念となります。念と念が重なり積んで業即ち働らきとなって実現するのであります。これが願望や実現の法則です。だから奪うものは奪われ、与えるものは与られるのです。布施するものは布施されるのです。人の心を傷つければ自分も必ず誰からか心を傷けられる。この原理に落ちこぼれは無いのであります。

心と云うものは力であり磁力を持っているわけです。唯その姿や形を見る事が出来ないから、常に不平不満を言っておればその人は、不平不満をあらゆる処から引きよせて不平不満の不幸な人生を送るしかありません。

不幸な人とは、それが天から与えられたのもなく、めぐり合わせでも偶然でもなく自分の責任によって集めて来るのです。

幸福も亦自分の心が幸福を引きよせているのです。

日常生活に於て、今私に与えられている事に感謝する心の経行をすべきです。父母と祖先に感謝する事が土台となるわけです。父と母、父と母と十代さかのぼれば先祖の父母は千何百人になると云う。そのルーツのうち一人いなくても私と云う存在はありません。私一人は千何百人の凝結した私であつて、私の中に先祖が生きているわけです。先祖を大切にするとはその様な沢山の先祖を背負っているのだから自分を大切に且つ尊敬しなければ先祖を大切にしていると云われません。自分一人だけの慾望は沢山の先祖達に対する粗末極まる慾であつて成就は出来ません。

夫唱婦随と云う事は封建時代当然だつたでしょうが、今私達は夫唱婦和が天地の法則である事を信じています。

願望成就にせひとも忘れてならない事が二三あります。

先ず他から同情やいたわりを求むる心を断然とすてる事。自分が罪惡深重の凡夫であると卑下する事を止める事。さとり澄ました如く清く貧しくと云う清貧礼讚の思いを放棄する事です。自然は豊かに我々に与えてくれているのだから、だから他人の健康や成功や幸福をそねむ(嫉妬)のでなく、私が事として悦ぶ心の習慣。自分は勞せずして喜ぶことは幸福の福の神を招きよせる磁力を出すわけです。明るい心で毎日の人生を歓迎する。こうして毎日の自分の心の径行をして行けば願望はすべて心に思い認めたものが現実として具象化するのです。

この人の人生は幸福になるしか無いのです。

不幸な人の心の経行となるものは先づ不平不満愚痴を言わないと話題のない人で、人の幸福や成功をいつでも羨望嫉妬し他の欠点を嫌悪す

る余り惡意惡言を弄もてあそび、来もしない不幸や變事に不安と恐怖をあまり立て、取り越し苦勞や持越し苦勞につかれ果て、常に變事惡事に心配苦勞する。毎日こうした世界に自分の心の住居を置き、それを心の歩く道としたならば惡の願望だけ成就して不幸な人生を送るわけです。

幸福しあわせになるには健康で寛容で感謝が習慣になつていれば明るい毎日しかその人にはやつて来ないのであります。

お不動様のお姿を見るとあの劍でマイナスの惡の想念を切り破り、それでも惡に近づこうと云う人の心をあの左手のひもで縛りつけても引っ張つて来て、頭に戴く八葉の蓮華の座に乗せて幸福の世界へ連れて行く尊い慈悲とたくましい働きを感じるのでございます。

私の寺の境内に十年程前ですが三十三体の乙女觀音の石像を建立しました。それは今までの此の世で逢つた觀音様ばかりです。私の今までの

人生上で逢った観音様だからむつかしい名前はついてません。恋慕観音とかトンボ観音、せせらぎ観音とかスマレかんのんと私達の生活に身近かな御名の観音様達です。

その中に「子恩観音」と云う観音様がござい  
ます。側にこんな詩を書いて置きました。

私<sup>が</sup>わたしになる為に

私に与えられた子供達

片身のせまい思いをさせまいと

無気力でしょぼくれ姿

正体もないへべれけの姿

いやしげな姿も見せたくない

苦勞も貧しさも超えて

清く正しくふるい立つ力を

与えてくれたのは子供たち

しみじみと子の恩を思う

今まで生きて来た悦び

合掌して有難とうと拝む

私<sup>が</sup>私になるために

観音さまが私の子供となつて

私のまえに現われて下さつたと

本当に私は信じています

毎日いろんな処からそれも近くの人より遠い処から参拝の人がお参りにおいでになります。

子恩かんのんの前で、いつまでも立つてひそかに泣いて行く女の人を何回か見ました。

大事な子供を先立たせたお母さんだろうか、或は親にそむいた罪を感じた人だろうか。私  
はそつとしてその悲しみを掘り出す様な無作法  
はすまいと思つてます。

子供に対して有難うと合掌する気持が湧いた  
時始めて親になつたと言えるでしょう。

子供がいたから此の子の肩身を狭くさせまい  
と、親である私は下手くそでも曲りなりでも、人生  
を恥ずかしくない様に素直に正しく歩こうと努  
力して来ました。もしも子供がいなかったら平

気で悪い事などしたかもしれません。

観音様が私の子供の姿になって私を導いてくれたと心からそう思うのです。

人生と云う旅は長い。その長い旅は不幸になるより幸福の旅でありよろこびの旅でありたいと希つて居ります。最後に、詩人高見順はガンと宣告され目をつぶるまでの短い人生の旅に最高の意義深き人生を送つた方でございます。

こんな詩でした。

帰る処があるから旅は楽しい

旅の苦しさを樂しめるのも

いつか我が家に戻れるからだ

だから、駅前の塩からいラーメンがうまかつたり

つたり

どこにでもあるコケシの店をのぞいて

おみやげを捜したりする

この旅は、大自然に還る旅である

還るところがある旅だから

楽しくなければならぬのだ

やがて大地に戻るだろう

おみやげを買わなくてもいいのか

人間死ぬんじやない。魂のふるさと、生命の自分のふる里へ帰るのだから 楽しくなければならぬのだと思う。

人生とは楽しくなければならぬのだと断言しております。

そしてその生命のふる里に何を おみやげに持って行く可きかと鋭い一言を私達に残してくれました。

「おみやげを買わなくてもいいのか」と私も

亦この一言を皆さんにお伝えしたい。

その日までおみやげを求めて下さい。

私は私なりのお土産を持って行くこうと思っております。それは、

「生れて来た時の赤ん坊と同じ様な素直な心」それを、おみやげとして持つて行きたいと思うのです。



# インド留学記

その3

## 恩師バット先生のこと



東方学院講師  
駒沢大学講師  
阿部 慈 園

俳聖芭蕉にこんな句があります。

さゝれ蟹がた 足はひのぼるあし 清水哉しみずかな

東方学院院长中村元先生の最近著『学問の開拓』  
(佼成出版社)にこんな一文があります。

蟹はおのれの甲羅に似せて穴を彫るとい  
う。(一八二ページ)

インドの恩師P・V・バット先生の指導の  
もと、約四年半、わたくしは小さいながらも学  
的基盤ともいうべき「蟹の穴」をつくることか

できました。

帰国後、どこにも就職口のなかったわたくし  
に、中村先生は、

「東方学院にきて、サンスクリット語の初級  
を教えなさい」

といってくれました。爾来、東方学院の講師と  
して七年の星霜が流れました。その間、先生は  
わたくしに、実に八冊の共同執筆（共著）の機  
会を与えてくれました。『仏像散策』『仏教の経  
典』『新仏教語源散策』『仏教植物散策』（以上東

京書籍)『中村元の世界』(青土社)『比較思想論』

(放送大学教育振興会)『仏典入門』(NHK学

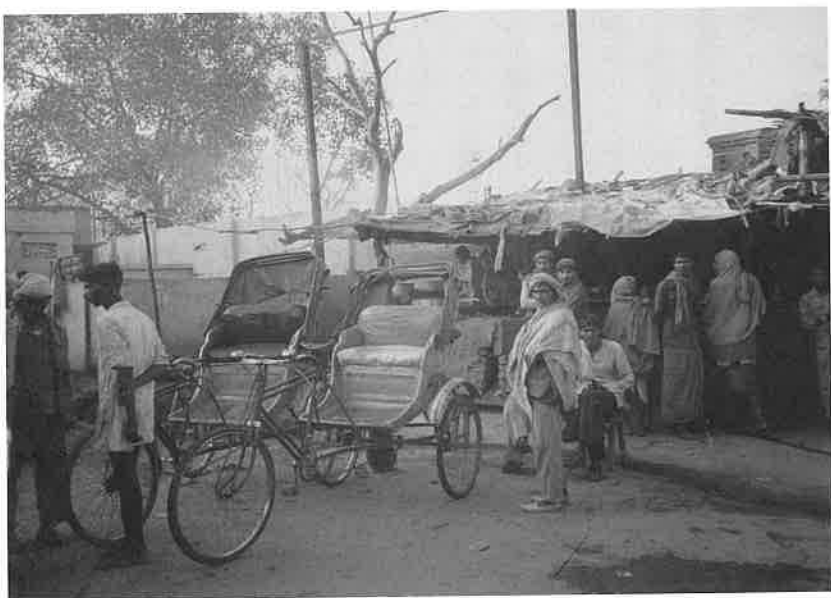
園)『仏教伝来1』(学研)がそれです。

両先生のおかげで、小さな蟹の穴は、次第次第にその大きさを広げつつあるといえましよう。

## 二

一九七四年十一月、インドの亜大陸に足をふみおろしてからの数ヶ月は、見るもの聞くものすべて珍しく、目をきよろきよろさせるばかりでした。眼前にくりひろげられる人々の動きや自然の移ろいを、あたかも自分の心はいまだ日本にあって、映画のスクリーン上で見ているかのようにした。何しろ、わたくしにとって、このインド留学が、初めての海外体験だったからです。

しばらくは、インド英語にも耳がついてゆきませんでした。ババット先生は、それを見こし



たのでしよう。はじめは、プーナ大学の若手の講師についてパーリ語のテキスト(清浄道論しやうじやうどうろん)を読むように指示されました。Kという名の女先生は、日本にも約一年間留学したことのある方で、仲々敵しい先生でした。先生の家へ、十分あるいは十五分でも遅れて行こうものなら、ご機嫌をそこねて、「この次、いらつしやい」とケンもほろろ。帰り路、「自分はインドへ学問を学びにきたのだ。法を学びにきたのだ」と自分にいいきかせつつ、この次は遅れないようにしました。K先生とは、二年間続きました。惜しむらくは、先生は四十歳を少しすぎて他界しましたが、あのバラモンの誇りをたたえた黒い大きな目をときに思い出します。

プーナにきて四ヶ月を満たすところ、バパット先生は「アベも言葉に少し慣れてきたな。ではテキストを読んでやるか」と判断されたのでしよう。所期のパーリ・テキスト(清浄道論しやうじやうどうろん)の

大註だいぢゆう)を、わたくしのために週二日読んでくださることになりました。毎金曜日と土曜日の、午前九時から十一時までの二時間。

ときどき寝坊をして、十分か十五分遅れて先生の家に行くことがありました。そんなときでも先生はちやんと椅子に坐って、待っていてくれました。ひとこともいわないで。

いくら官職を退かれ、自由の身になっても、八十歳を超えた老大家に、一対一で親しくテキストを読んでもらうことは、インドにあつても稀有なことでした。日本ではまず考えられないことです。恐らく、わたくしはバパット先生最後の弟子となる榮譽を得ることになるでしょう。

### 三

バパット先生は、一八九四年六月十二日のお生まれですから、今年なんと満九十三歳。当時、身長一七五センチ、体重八〇キロ、体軀堂々、

典型的なマハーラーシュトラ・バラモンでした。

近代インドパリ仏教学の祖ダルマーナンダ・コーサンビーを師とし、かれの推薦で、三十五歳のときアメリカに渡られました。一九三二年ハーヴァード大学より博士号を得られました。博士論文は「解脱道論げだつどうろん及び清浄道論の比較研究」と題するもので、インド人学者には不得手な漢文を駆使されたものでした。

先生はアメリカでのこんな想い出を語ってくれました。タンパク源の不足を補うために、インドでは口にすることがなかった卵を食べたこと。肌の色が少しく黒いので、黒人と見なされることがしばしばあって、インド人であることを表示するために、頭に白いターバンを巻いたこと。同窓に、日本からの故ミスター・ヒデオ・キシモト（東大教授岸本英夫先生）がいて、親しかったこと、などなど。

バパット先生は十数点の著作、百五十近い論

文を世に問われています。先生、どうかいつまでも長生きしてくださいように。

（つづく）



# インド留学記

その3

## 日本人の インド理解の盲点



東 方 研 究 会 託  
研 究 嘱 司  
保 坂 俊 司

「インド人くらい我々日本人に理解出来ない国はない」よく、日本人商社マンからきかされた言葉である。実際、よくトラブルがありそれがどうも日本人の方にその原因がある場合が多かった。もつともそれは、日本人の常識となっている価値基準からなされた判断によって、引き起こされるものであって、そのことから即日本人が横暴だとか云うのではない。あえて云えば、インドの常識を知らないために引き起こされるごく些細なことが原因で、それが積もって

不信感につながってしまったと云う場合が多いのである。つまり、一見些細な行き違いの溝は案外に深く、それが導く対立は時として決定的であった。そのために半ばノイローゼとなる人もでるくらいである。それは特に金銭利害の絡む商社マンなどに多く見られたが、頻度の差こそあれ日常生活で私も多く経験させられた。

その具体例をだすまえに、私が留学中大変お世話になったS商事の粕谷支店長の言葉を紹介します。「私は世界中の人間と商売をしてきまし



チャパティと野菜のカレー

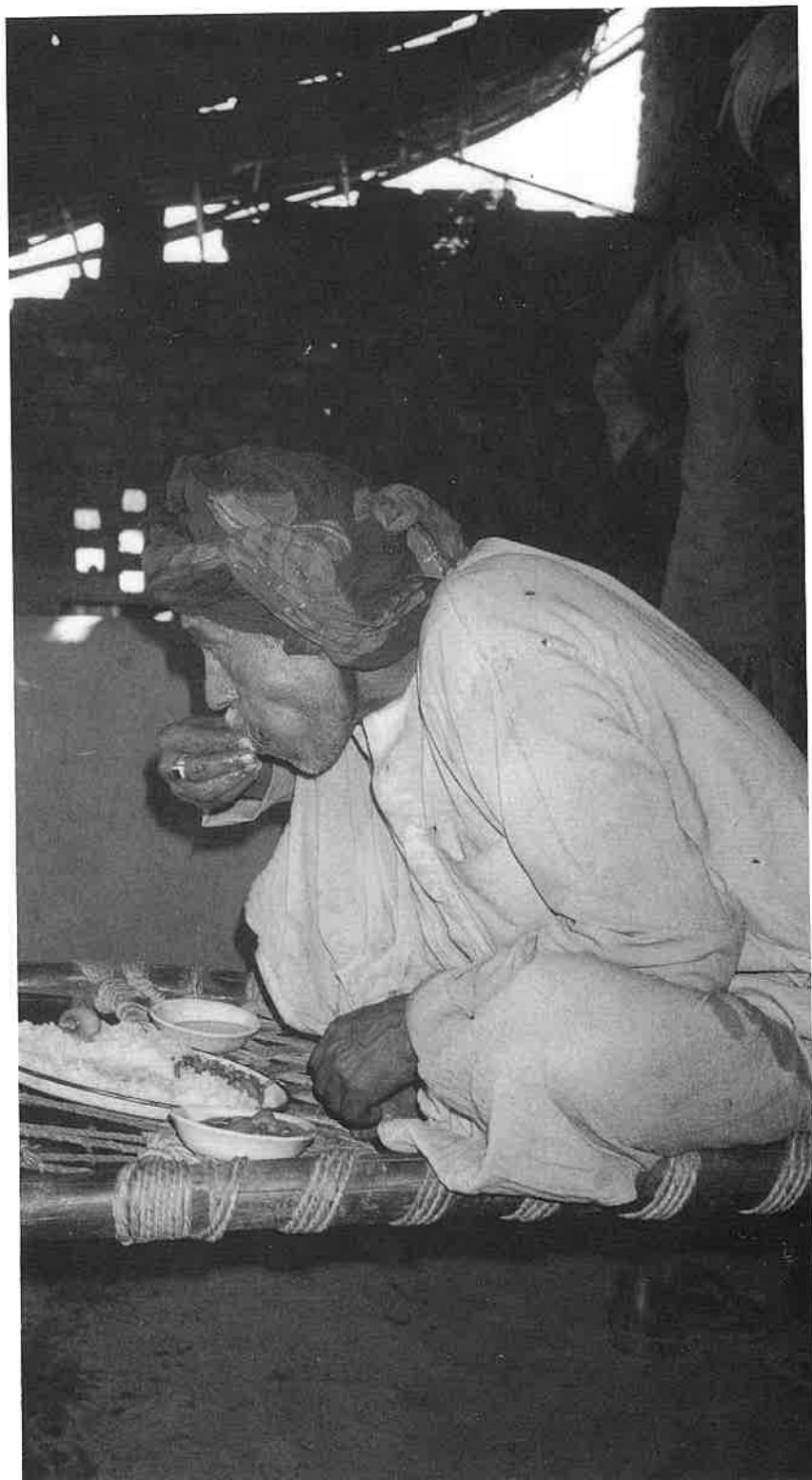
たが、インド人ほど商売のしにくい相手には会ったことがない。どうしてかと考えていたのだが、どうもそれは我々日本人が学んできたヨー

ロッパの常識が通用しないことにあるようだ。勿論我々の常識など通じない場所は、世界中にいくらでもあるが、そういうところはこちら側

に諦めのつくような環境というものがある。例えばアフリカの田舎町とかならこつちだつて覚悟ができてゐるから、諦めのほうがさきに立ち腹はたたない。ところが、一見ただけでは近代国家然としていてその実またく前近代的なところが我々を苛立たせる。それは、例えていえば、水道も無いところで小川の水を飲むことには耐えられても、水道が一応在るにもかかわらず、水が出たり出なかつたり、しかもこの灼熱の地でである。加えて、あなたがた研究者の怠慢である。我々は何処の国についても事前に研究するが、その際にはある程度の基礎知識を得られる虎の巻の様な本が、何処の国についてもあるものだが、ことインドについてはそれが無い。インドについて書いてある本はやまほどあるが、ほとんどは御釈迦様の生誕の地、あるいは仏教の発祥の地といった画的なものであつて、現実に生きるインドを紹介したものがほ

とんどない。だからよけいに、我々は苦勞するのではないかとおもう」まったく耳のいたい言葉であるが、その通りであると思つた。なぜなら私自身が最初の旅行でうけたショックの大きかつたことといつたらなかつた。空港に降りたとたん引き返そうかと思つたほどであつた。それまで随分インドについては勉強したつもりであつたが、それらはまったく現実のインドを語つてくれていなかつた。そして、私の知識もまったく見当外れなものだつた。それが現実であつた。そしてさらに粕谷氏は、どうしてあれほど研究者がいるのにインドの現代についてのまともな入門書一つないのだろうか」と畳みかけてくる。日本の繁栄を支える商社マンらしい鋭い指摘であつて、わたしはただただ恐縮するばかりであつた。

そう指摘されると、確かに思い当たることがある。日本の多くのインド学者といわれる先生





の多くは仏教学者で、しかもインド嫌いやインドに一度も足を踏み入れたことのない先生もいるときく。加えて仏教はインドでは実質七百年前に滅び、今あるのはただの遺跡、それも人の住まない荒野にばかりその多くはある。こんな状態だから「インドは良い国だが、インド人がいなければもつといいのだが」などと冗談混じりでおっしゃる方が結構多い。したがって、今日のインドなどに興味を示す先生の数はけっしておおくない。もつともそれも近年漸く方向が変わってきてはいる。いうなれば、現代インドをその長い歴史の線上で理解しようとする試みは、われわれの様なインドで学ぶ事のできた世代に託された課題ということになる。少くともわたしは、粕谷氏の指摘でそう決心した。

そう考えだすと、いろいろなものがことごとく興味の対象となってくる。特に、生きたイン

ドを研究対象とする私にとって、この指摘は千金の値があった。

#### 日常生活のインド

確かに、日常生活は、いろいろのお経の文句にあるような清らかですごしやすい理想郷とは違って楽ではなかった。四十四五度の気温もさることながら、湿度九十パーセント以上という蒸し暑さには些か閉口した。座っていても汗が背中をスーと流れ落ちる、その気色悪さといつたら例えようがない。眠れぬ夜が幾日もつづく、勿論夜昼の区別もないのである。慣れるまでには、相当の時間が必要だった。もつとも慣れてしまえば大した苦ではない。ただ始めのうちには水が飲めなかつたので往生した。つまり、生水は腹をこわすし、肝炎などの伝染病になるのとことと飲まぬのが常識なのである。しかし、そ

うは云つても一週間や十日ならいざしらず、何年も滞在しようとする人間がそんなことでは先が思いやられる、病氣になつたつて死にはすまい、インド人は皆おいしそうに飲んでいて、「はいか」そう腹をきめると、今までの心配は払拭されて、冷たい水のおいしさを思う存分味わえた。水くみ場に並んでいると、寮生が親しうに声をかけてきてくれる。今まで何とはなしに他人行儀だつた連中がである。まさに郷に行けば郷にしたがえである。

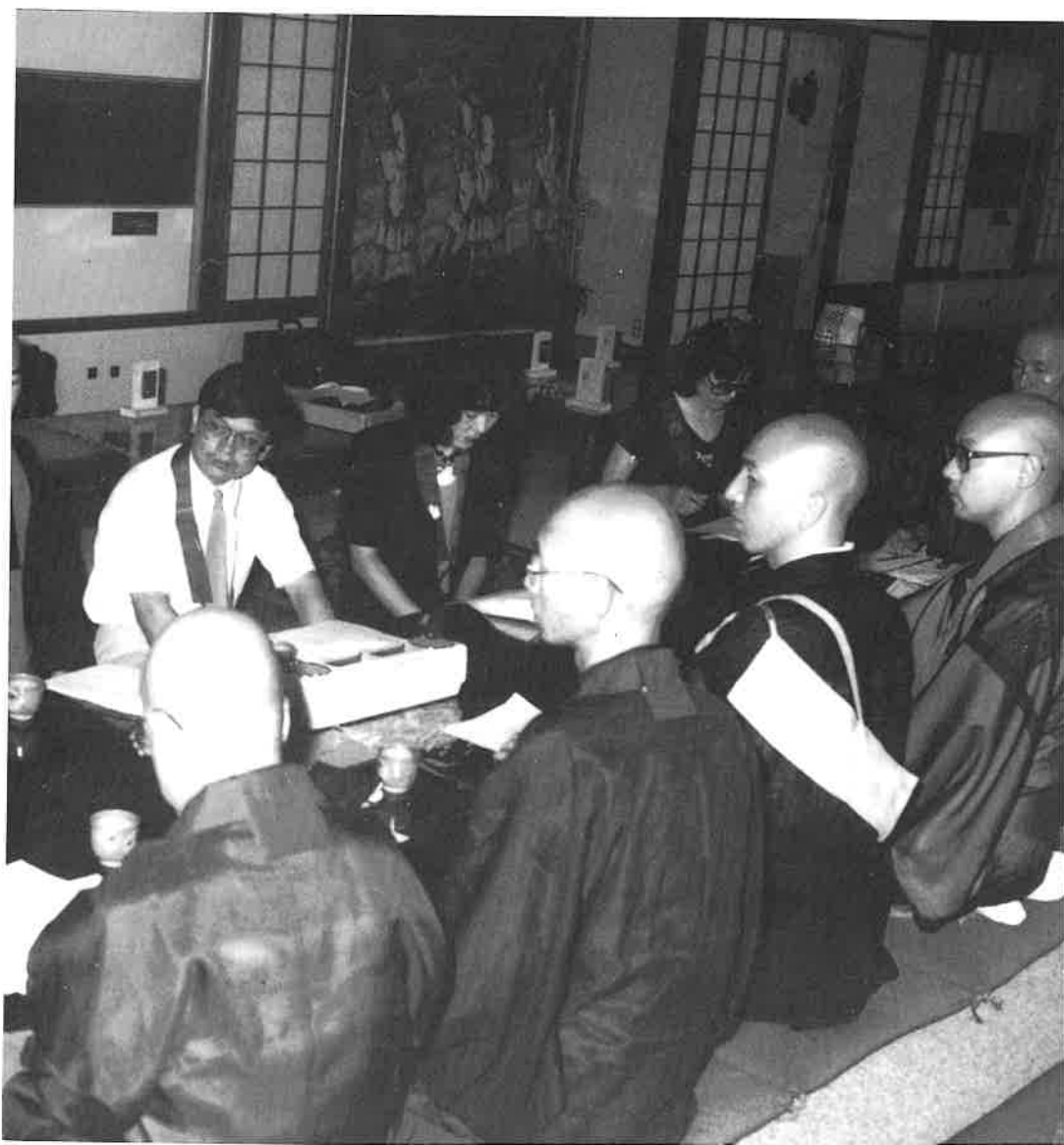
幸いにして腹をこわすこともなく、私の寮生活は順調にはじまつた。

学生の生活は、六時半の朝食の合図ではじまる。カンカンと鐘が打ち鳴らされると総勢二百人の寮生が、ぞろぞろと食堂に集合する。食堂は菜食主義者と非菜食主義者とは別である。私は毎日出る卵焼きを食べるために非菜食主義者の席につくことを常としたが、時々菜食主義の

席に回り彼らと食事を伴にした。両者の往来はごく自由で、頑な印象は受けなかった。しかし、中には肉を生まれてこの方食べた事のない人も多く、彼らの厳格さには感心させられた。しかし決して、苦行しているといった感じではなく、むしろ菜食主義者のほうが、旨いものを食べているようにも思えた。やはり歴史と伝統のなせる技であろう。メニューは毎日替わり朝食には、不満はなかった。ただ、牛乳はどうも水で薄めるらしく妙に薄味であつた。それは時間が遅くなればなるほど顕著であつた。(つづく)

# 海外留学僧第2回総会

7月28日



## 出席者

黒田 武志師 善光寺海外留学僧派遣育英会理事長  
佐藤 俊明師 善光寺海外留学僧派遣育英会常任理事  
田中 智誠師(タイ、ワット・パクナム)  
河内 義宣師(アメリカ禅センター)  
安井 隆同師(インド、カルカッタ大学在学中)  
中野 良教師(スリランカ、ケラニア大学留学中)  
季 幼 麟氏(中国より駒沢大学留学中)  
早田 啓子氏(インド、カルカッタ大学留学予定)  
司会 桐元 大智師



佐藤(常任理事) 本日はお暑いところを、第二回海外留学僧定例総会にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

善光寺海外留学僧派遣育英会は、一昨々年の一月十五日に発足いたしました。そして一昨年

の春には、黄檗宗の田中君、浄土宗の梅田君がタイへ。そして秋にはアメリカの受け入れ準備のために、国安君が派遣されました。

昨年の春は、インドのカルカッタ大学へ安井君、アメリカ禅センターへは河内君、中野君は

スリランカへそれぞれ派遣されました。

そして去年の八月二十八日、たまたま帰国していた安井君と国安君を迎えて、第一回の総会が持たれました。今年は、岩波君と島崎君が、四月にアメリカに向けて出発しました。追って五月には、浦田君がタイに出発いたしました。このように、現在アメリカに二名、タイ・スリランカ・インドにそれぞれ一名が派遣されてお



善光寺方丈

りませんが、加えて、中国の李君が駒沢大学に留学、早田さんはインドのカルカッタ大学に留学の予定であります。というわけで、今回は大変大ぜいの方にお集まりいただいております。ありがとうございます。

今日は、留学を終えられた方々に現地での感想なり、あるいは問題点等を、忌憚なくお話しただくと共に、これから留学なさる方々に、いろいろご要望なりをお伺いしたいと思います。

### 帰国留学僧の現況報告

桐元 善光寺院代の桐元でございます。本日の司会をつとめさせていただきます。早速ですが議題に沿ってお話をすすめてまいりたいと思います。まず最初に、すでに留学を終えられた方々の現地での問題点、又、今後に生かすことのできる体験やご要望なりがありましたらお話をうけたまわりたいと思います。

では一言理事長よりご挨拶をいただきます。

## 方丈（理事長）

皆様ご遠方からご苦勞さまでした。

この度の例会は、昨年より一カ月早くになりましたが、その理由は、すでに留学を終えられた田中君が、来月、東西靈性交流会で、ヨーロッパに行かれることになりました、例会が早まりましたことをご報告いたします。

みな様もご存知のように、この育英会の資金は、檀家の方々ははじめとする有縁無縁の方々が、一食に一口ご飯を減らしていただいて喜捨していただきたいとお願いした結果お預りしている尊いお金であります。この方々のご恩に報いるためにも、皆様には、命がけで勉強し精進してほしいと願ってやみません。

田中（タイ・ワットパクナム） それでは東西靈性交流会について簡単に説明させていただきます。

これは今から十二年前からヨーロッパのキリスト教とくにカトリックと日本の仏教とが交流しようという趣旨ではじめられたもので、今回は第三回目の派遣ということであります。曹洞宗から十一名、臨済宗から十四名、黄檗から二名、合計二十七名であります。これは花園大学にあります禅文化研究所が事務局になっておりまして、今回は、禅三派、ヨーロッパのカトリックの司祭を養成する修道院とが個別的に交流しようというその端緒になるものと思われま

す。

日本では、比叡山開創千二百年を記念した宗教サミットが開かれています。国際的な交流ということになりますと、ヨーロッパの修道院などにおいては、伝統的な慣習その他の問題で、実際に門戸を開けるとなると様々な不都合がでてくるといわれていますが、多くの協力者の支援でその障害をふまえて、とにかく最初の目的



田中智誠師

を全うしようということど実現した今回の派遣  
であると聞いております。

八月二十一日にオランダに参りまして、そこ  
からヨーロッパ各地の修道院に派遣され、現地  
の修道士の方々と共に体験するという予定にな  
っております。

九月にはイタリアでシンポジウム、合同接心、  
ローマ法王との謁見ののち帰国ということにな

りますが、四年後には、ヨーロッパから修道士  
の方々を招いて、禅道場で共に修行するという  
ような構想がたてられております。

ヨーロッパのカトリックが、こうした積極的  
な動きをみせていることに対して、日本の仏教  
界から、どうもカトリックは意図的に禅を体制  
のために求めようとしているのではないかとい  
うような意見もございますが、これに先だつて  
六月に、東京で、国連大学主催の国際宗教セミ  
ナーがございました、様々な宗教界の代表の  
方々が集つて、いろいろの宗教社会における発  
表がなされました。

出席者のおひとりキタウ神父は、ヨーロッパ  
の宗教における宗教体験に基づく理性中心の宗  
教は、社会的関心に移行しやすいこと、日本宗  
教の心身一如的理解が、宇宙の一体感（エコロ  
ジー）に対して、思想的貢献を成すと同時に、  
社会的関心を希薄化するため、両者が相互に学

ぶことの大切さを提唱しておられました。

ヨーロッパの修道士の方々と日本の禅宗の僧とが協力して何かできることはないか。又、日本においては、国際的環境の中で共同体験をするという点が少ない現状でもありますし、私なりの抱負を持って、ヨーロッパを見聞してまいります。

河内 (アメリカ禅センター)



河内義宜師

アメリカという国はあらゆる人種が集って、それぞれの文化を背負って勝手に生きている社会といえるかもしれません。現在アメリカの文化の、ひとつの曲がり角ともいえましようが、その人たちが、東洋の禅というものに非常に興味をもって、今すでに、アメリカには二〇〇位の禅センターがあるといわれています。その中でも日本の禅が最も脚光を浴びております。

アメリカに行つてびっくりしたのは、禅センターに来る老若男女みなさんが、サンフランシスコの禅センターの礎えを作つた鈴木俊隆しゅん師の本を読んでいるんです。

私が参りましたのは前角老師の系統のロサンゼルス禅センターでしたが、そこではすでにアメリカ人に正当な法が伝えられて、アメリカ人の中から師家の養成がなされているほどで、日本から布教に赴くという段階は過ぎた、むしろ本筋のものを学ぶためにはアメリカに行つた方

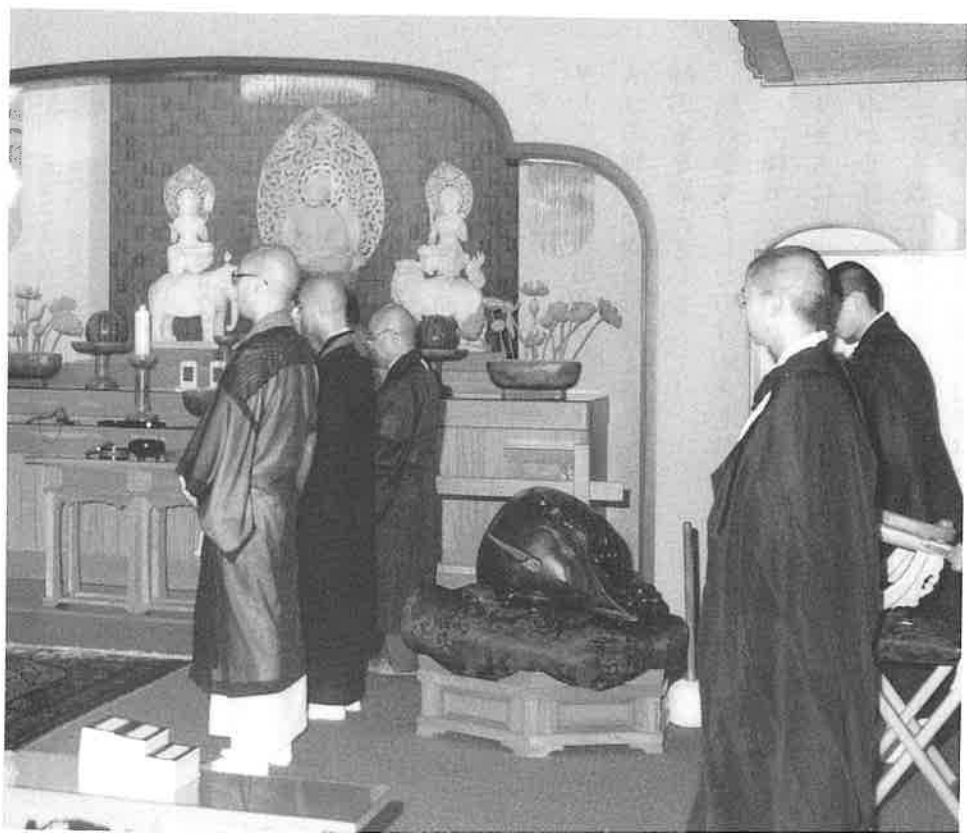


がいいのではないかと思うほどであります。

ただ、文化、慣習などの基本が違いますから、一見すると変な感じもいたしますが、アメリカの社会の中でどう咀嚼されていくかが興味のあるところであります。

グラスマン先生という方はユダヤ人ですが、おそらくユダヤ人という文化を負ってこの在り方があるのかと思うのですが、実におもしろい生き方をされております。一月一日〜十日までセミナーがありまして、求道心というテーマで討論会がもたれたのですがその中で毎日講師をお呼びするのです。カトリック、プロテスタント、ユダヤ教、上座部仏教の学者・大乘仏教の学者、曹洞禅の僧と、多彩な顔ぶれなのであります。

グラスマン先生のお考えは、民族・宗教を問わず人間の仏心に変わりはなく、従ってどんな宗教でも理解できないはずはない、という発想



なのです。集まってくる人たちも、それぞれの宗教を持ちながら坐禅をしているという方々が多くいます。日本の場合は純粋に、何が一体悟りだ、と核心に切り込んでくる坐禅のしかたをしている。

こうしてお互いに一緒に修行することは大変有意義なことだと思いますから、どんどんアメリカに行ってほしい。ただ、行くからには、せめて、初歩的な修行を終えていかないと、むしろでは、日本を本家だと思っていますからね。日本の文化という面を心得ていかないといけないんじゃないかと思います。

中野（スリランカ、ケラニア大学留学中）

その国独特の文化の中に入って生活し勉強するということは、ホテルに泊って旅行するのとは違うわけです。例えばトイレ、形が違えば使い方もちがう。それが自然に使えるようになってはじめて、何かが見えてくるような気がする





安井隆 同師

んですね。四年間スリランカにおいて、ようやくそんな事がわかりかけてきました。

スリランカというのをご存知のように、南の上座部の本家的存在であります。お国柄、早くから仏教が英語での理解がされていた国です。しかし、日本仏教、禅仏教という点ではまだまだ理解が浅いように思います。アジアの人たち、いや世界の人たちが今、日本に目を向けていま

す。その中で我々はどのようにアピールしていけばいいのか。

スリランカの人たちは私に「日本仏教とはどういうものか、禅仏教とはどういうものか、禅の実践はどのようにするのか」と、様々な人が、様々な場所で質問してきます。

こうしたテーマを今後更に追求していきたいと思えます。

安井（インドカルカタ大学在学中）

お釈迦さまのおられたインドの大地を歩くことがインドでの当初の目的でしたが、カルカタ大学にご縁があり、この一年半ほどは大学での勉強に費しています。

あの大きな大地を歩けば、何か大きなものが見えるかもしれないと思って歩いても、見えてくるのはいつも、一番ちっぽけな自分です。のびのびと歩きながら、自分が対話する相手は何ともちっぽけな自分なのです。いつもぶつかる

のは自分でした。そこで、大学の卒論も「原始仏教における我」というテーマで書かせていただきます。

先般、口頭試問と公開セミナーがありました、大学の教授が十三名ほどと学生、私がお世話になっている大菩提会の方々など三十五名ほどが出席してくださって、一時間半発表させていただきました。

たまたま雨期で、大雨が降ってまして、電気の設備もないし、暗いパーリー学部の破れたガラス窓から風は入ってくるわ、雨は入ってくるわ、慣れない英語で目はチラつくわで、形を整えるという事はかなり大変なものだと思えました。勉強すればするほどわからない事がふえていきます。世の中で誰が一番の敵かというと、自分ほどの敵はいないということに気がつきます。又、自分ほどの味方もないわけです。

どうにもならないちっぽけな自分あればこ

そ、ひとりの出家者として求道する心を持ち続けることができるのかとも考えます。わからないことはわからないままに宗教の信仰によって、みえないもの、不思議なものにただぬかづき、お念仏を唱えさせていただいている現在です。

桐元 李さんは良寛さんの研究をなさっております。良寛さんに興味を持たれた



桐元 大智師

きつかけなどお聞かせいただけますか？

李（中国より駒沢大学留学中）

私は三年前に上海からまいりまして、日本に来るまでは良寛さんをほとんど知らなかったと言つてもいいくらいでした。

私は、上海科学技術大学に勤めておりましたが、そこからお金をいただいて、日本へ留学することができました。ところが、予定されていた一年間では何もわからないと気がついて、大卒にお願ひして、学部からもう一度やりなおそうと思つたのです。二年目からは国からの仕送りは一切なくなりましたので、アルバイトでつないできました。

その頃、飯田先生にお会いしまして、先生の良寛さんの講義を受けて、はじめて良寛さんという方を知ることができました。

先生からたくさん大切な本をいただいて、勉強していくうちに、中国では誰ひとり知られて

いない良寛さんを、是非紹介したいと思う気持ちがのつてきました。

中国は今、一生けん命お金を作ることに必死で、精神的な面では何か欠けていると思えてなりません。もっと正しい人生の生き方をしなくてはいけないと思います。その為には良寛さんのような正しい生き方を、中国の人に紹介してあげたいのです。

飯田先生のおかげで、黒田方丈さまにお会いすることができ、思いがけなく奨学金を頂くことができて、感謝の気持ちで一杯です。こうして生活が落ち着き良寛さんの勉強が精一杯できることの感謝を、もっともっと勉強して、日本に在る間にレポートなり本なりを、中国に書き送り、良寛さんを紹介していきたいと思つております。そのためにはまだまだ勉強不足で力がありません。一生けん命頑張りたいと思ひます。皆さんよろしくお願ひします。

桐元 今後とも是非ご精進くださるよう、頑張  
ってください。

早田 (インドカルカッタ大学留学予定)

私は昭和女子大に籍を置いて、仏教思想・美



早田 啓子女史

術史・近代文学など、かなり広範囲な科目を教  
えています。

大学院では仏教を専攻しました。もともと、  
美術が好きでどちらにしようかと思っただけ

でしたが、仏教に対する私の興味というのは、  
日本の近代史の流れの中で、高度成長のひずみ  
というか、そのひずみに、私の青春時代はモロ  
にぶちあたったという感慨があります。生きて  
いて、その居心地の悪さ、大学では何も学ぶこ  
とができないと、そう思いました。卒業しても、  
自分の目で見、耳で聴き、手に触れるもの、そ  
んな自分の感性を取り戻したいと思いました。  
言葉だけがひとり歩きしているような日本の物  
質文明の中で、直観的に不安を覚えたのです。  
そうしたことが、私を仏教に向かわしたのでは  
ないかと思うのです。

私は、自分における修行は、勉強すること、  
絵を描くこと両方をふくめて、修行の場だと思  
っています。

今回、派遣させていただくことになり、イン  
ドの初期の仏教美術をテーマにカルカッタ大学  
で学びたいと思っています。

## 世界における禅のとらえ方

桐本 今までにも出てまいりましたが、世界における禅のとらえ方には、各国で様々なギャップがあると思うのですが、そのことについてご意見を伺かせただけですか。

佐藤 先ほど伺いますと、アメリカの禅というのは、中国の禅とか初期の日本の叢林のように、経営の基盤というのは、修行する人たちの作務に負うところが大きいんじゃないでしょうか。

河内 ご存知のようにアメリカには日本のような檀家制度はありませんから、数ある禅センターにおいて、それぞれ運営の仕方が違います。

私が最初に行ったお寺は、マンハッタンから二、三時間も山の中に入ったところにありましたが、全体が二十四万坪もあるんです。建物はかつて教会だったのを使っているんですが、い

くつもコテージがあつてそれを芸術家たちに貸しているんです。彼らはそこに住んで芸術活動をしながら坐禅をするんですが、そんな収入ですとか、毎週末には、お茶、お華、空手など、日本文化の研修をして人を集めて、その会費を収入とします。毎月一回の接心の参加費などもかなり高額なものです。

グラスマン先生のところでは、ベーカリーを経営しています。ケーキやパンやクッキーを作るんです。他には、住んでいる人たちがメンバーから会費をいただいています。他にもグリーンガルス農場というのは農場経営による収益をあてております。

また、アメリカにはハウスレスという家のない人たちが大ぜいいて社会的問題になっているんですが、グラスマン先生はこうした人たちを集めて仕事を教え、社会に復帰させる仕事にもけん命です。教会や他宗の人たちと、宗派の別



佐藤 俊明 常任理事

なく協力し合って具体的に実践しているわけ  
です。中国叢林においては作務が非常に大切で  
すが、グラスマン先生は実にそれを一歩すすめて、  
社会の中で働いてこそ意味があるとされて、ど  
んどん世の中に出ていっておられますね。

アメリカという国においては、そうした実践  
を具体化しないと受け入れられないということ  
は現実です。

佐藤 アメリカと対照的なのはタイだと思う  
んですが。

田中 タイでの瞑想のあり方というのは、極く  
最近、信者さんの為に本が出はじめてきていま  
す。瞑想道場というのはいくつか出来ておりま  
す。

方丈 それぞれにご苦勞の中で修行していただ  
いてるわけですが、わからなくなればなるほど  
情熱をもって事にあたっていただきたい。李君  
は大変日本語がおじょうずです。私は言葉が不  
得手でたいへん苦勞しました。言葉の違う国で  
生活し勉強するというのは並たいていではあり  
ません。それを乗りこえて、どうか命がけで修  
行してほしい。

みなで力をあわせれば何事かできます。未  
来の理想に向かって精進することが宗教家の使  
命であろうと思います。

佐藤 方丈さまのねらいは、宗祖を通して釈尊





李幼麟氏

の教えにかえるということです。

日本はいわば部派仏教です。インドに大乘仏教が興る直前の部派仏教の如き末期症状にあるのが、今日の日本の仏教教団の姿じゃないですか。

河内君の話から、アメリカでは日本のように布施によって生活するのではないといわれましたが、日本には幸か不幸か檀家制度があつてそ

の布施によって生活しているわけです。

先ごろ「地獄の話」という本を書きましたが、その作業中に、布施に支えられて空しくすごしている坊さんが阿鼻地獄に落ちるということを教えられました。そんなことにならないように私たちは努力しなければなりません。今日の日本仏教を救うには、内部でいくらかがいてもいいアイデアは浮かびません。そうした時にみなさんが各国に向かわれている知識を得、経験されて、それらを結集してはじめて、現在の日本仏教に、新しい息吹きを与えてくれるのではないかと期待しております。ですから、たとえ日本の仏教がいかにもじめな状態にあらうとも、理想を持って進むしかないと思います。

トルストイが言っております、理想というものは実現できるものじゃない、実現した時は理想ではなく現実である。しかし実現の要求を持



中野良教師

たないのも理想ではない。理想とは常に現実の一步前にあつて、現実を浄化してゆく力なのである。しかもその力が大であればあるほど現実はずいぶん離れてしまう。ここに理想を追う者の苦悩がある。こんなことを言っておりました。仏教における涅槃と同じことです。固定したものではなく不住涅槃だと、常に進歩していくことでもあります。

これから留学僧はふえていきます。その方々と力を合わせて、この日本を救うべき理想に向かつて、お互いに精進していこうではありませんか。

今日は本当にありがとうございました。

粥しゆく

(駒沢女子短期大学学監 教授)  
東 隆 真

禪宗のお寺、とくに禪の修行道場では、朝食は、お粥しゆくときまっています。

しかし、朝食ちようしやくとか朝ご飯あさめしとかお粥かゆとはよばないで、粥しゆくといっています。あるいは、粥座しゆくざともいいます。

粥しゆくのまえを粥前しゆくぜん、粥あとを粥罷しゆくばいといいます。

また、小食しょうじきあるいは点心てんじんともいいます。

点心は、昼食をさす場合もあります。修行僧が托鉢たくはつに出かけて、信者からご供養をうける昼食をいうこともあります。

点心は、いまも中国ないし中華料理の方で使わ

れていることばです。

東京の吉祥寺(武蔵野市)には、最近、「点心てんしんの家」という中国料理店ができました。

小食も点心も、軽食、間食、お凌ぎの意味です。

昼食は、お齋とま、飯台はんたい、中食ちゆうじきといえます。お昼ひる、お昼ご飯などとはいわないのです。しかし、ご飯をいただきます。

夕食は、薬石やくせきといえます。略飯台りやくはんたいということもあります。お粥あるいはうどんなどをいただくのです。軽くご飯をたべることもあります。

さて、**粥座**（朝食）ですが、永平寺、総持寺をはじめとする本格的な禅の修行道場では、粥をいただくには、はじめからおわりまで、きびしい一定の作法と順序というものがああります。

面倒なものです。

まず、午前三時あるいは四時ないし五時に起床。

**東司**（便所）、洗面をすませ、**僧堂**で坐禅をします。一炷いちゆうとって、一本のお線香が燃えつきる時間ですから、だいたい四、五〇分間でしよう。

この時、お袈裟けさをかけて坐禅するのではありません。一炷の坐禅がおわってから、お袈裟を頭上にいただき、おとなえごとをしてから、はじめてお袈裟をかけるのです。

それから、**法堂**（本堂）で、**朝課**といって朝のおつとめのお経が始められます。およそ一時間くらいでしょう。

朝課がおわったら、僧堂へ帰ります。

僧堂で、ころもを着て、お袈裟をかけたまま、坐禅をくんで、粥座となります。

もちろん、粥座の準備は、**典座寮**（お台所）の修行僧の担当です。使用人がするのではありません。

粥をいただくには、**応量器**とよぶ食器をもちいます。

応量器は、うるし塗りの五つ重ねの食器（**大の鉢**）に、**匙**、**箸**、**鉢拭**、**鉢刷**などの一式です。雲水うんすいさんは、誰でも、応量器を携帯しています。応量器をもたない修行僧はいないので。粥座は、お粥と焼き塩、それに香のもの、梅干しが添えられるといったところですよ。

お粥は、合図が出たところで、一度だけお代りをするのでございます。それを再進さいしんといいます。

およそ食事中は、無音、無語です。応量器を

あつかうときにカチャカチャと音を出してはいけない、いわんや、鉢を地面（土間）に落としたり、むかしから下山させられることになっていきます。

また、香のものをバリバリと音をたてて噛んだり、舌つづみを打ってお粥をたべたりしません。会話もしてはならない。

要するに、絶対に音や声を出してはいけないのです。

粥は、展鉢の偈、十仏名、施食偈、遍食槌、五観の偈、擎鉢の偈などといった、おきまりのおとなえごとをしてから、はじめていただくのでして、いきなり食べるのではないのです。

食べ終わったところで、折水の偈がとなえられ、応量器をきちんと収納し、後唄の偈があり、これで行うやく、粥座がおわることになるので、す。だいたい五、六〇分を要するでしょう。

仏教僧侶がお粥を食べるといふのは、インドのお釈迦さまの時代からのようです。乳粥、酥粥、胡麻粥そのほか、いろんな種類のお粥を、信者がつくって、お釈迦さまやお弟子たちに供養しました。

中国では、朝食はお粥です。中国を旅行された方は、ホテルで必ずお粥が出されたことを思い出されるでしょう。

禅宗の方で、朝食にお粥を食べるのは、おそらく中国のこの食生活の習慣が採用されたのではないかと、私はおもっています。

もっとも、禅家のお粥は、いわゆる「白粥」という、ふつうのお粥で、それはお米が三割程度、水が七割程度の割りあいですから、一般家庭のそれとは、ずいぶんちがいます。お粥に天井や自分の眼玉がうつるので、別名「天井粥」とか「眼玉粥」とかよんでいます。

鎌倉時代、曹洞宗の道元禪師や瑩山禪師のこ



ろ、永平寺や総持寺では、一二月八日や正月一日、一六日には、「五味粥」や「豆粥」など、特別のお粥を食べていたようです。

一二月八日は、お釈迦さまがお悟りをお開きになった記念日、「成道会」の日です。

この日を記念して、「五味粥」をいただくのですが、「五味粥」とはなにを材料にしたお粥なのか、私にはよくわかりませんでした。江戸時代、臨済宗の学僧、無著道忠禅師のあらわした『禅林象器箋』という書物によれば、雑穀の衆味を意に随って合せ造る粥のことだとかいてあります。

先年、中国に出かけたとき、通訳の何儒冒さんにたずねたところ、なつめ、小豆、西瓜の種、梅、蓮の実、胡桃、百合の根、山査子を粉末にしたものを水で練ったものなどを入れたお粥のことで、臘八粥、蓮子粥ともよび、一二月八日に食べるのが、中国人のならわしだとのことだ

した。これにはおどろきました。

先日、家人が、『漢方粥』（磯公昭著。東京書籍、昭和六一年刊）を購求してきたので、なんの気もなくパラパラと頁をめくってしまいましたところ、中国人は古代からお粥を食べる習慣があつて、お粥を売る店も多く、お粥の種類も豊富で、「春夏秋冬、四季それぞれ異なった粥を売り、人々は好んで粥店に足をのぼし、音をたてて大きな碗に口をつけてすすっていたのでした。

たとえば、春には野菜粥、夏は緑豆粥、秋は蓮根粥、冬は臘八粥（臘八は旧暦の十二月八日で釈迦が悟を開いた日といわれる。この日に食べる粥が臘八粥）と羊肉粥というように、健康な人もふくめて家中の人が食べていました」とあります。

また、同書には、蓮の実粥の作り方、効能などが書いてあります。

蓮の実を中国漢方では蓮子といい、この蓮子

は、「心臓機能を強め、腎臓に養分を与え、脾臓に有益であり、老化、老衰に効力がある」ということです。

次に、「豆粥」とは、たぶん大豆あるいは小豆を入れてつくるお粥のことでしょう。私が、叢林（修行道場）にいたとき、一二月八日早朝のお粥は、固い小豆粥でした。

とまれ、禅門でお粥を食べるのは、「粥有十利」といって一〇の利益があるからだといわれています。

お粥の一〇の利益とは、色、力、寿、辞清、辯、宿食、風除、餓、渴消です。

要するに、消化がよい、肌や顔のつやがよくなる、音声がなめらかなになる、宿食を消すといった利益です。

禅宗のお粥は、一般家庭にも広がってゆきました。

京都には朝粥の習慣がありますし、朝粥を食べさせてくれる専門店もあります。

和歌山県、奈良県、山口県あたりにも、朝粥とか茶粥が伝わっています。

これに関連して、横浜の中華街に、お粥専門店のお店があるのを思い出します。

昨今、日本のホテルでは、朝食にお粥を出すところが増えてまいりました。

また、お粥を好む日本人は意外に多く、前記のような書物がたくさん書店に出ていますし、私もある婦人雑誌のインタビュに応じたことがあります。

食べものではなくては困りますが、有りすぎても困ります。

このごろの日本は、食べものが豊富に過ぎて、栄養過多となってきたので、お粥に目を向けたのでしうか。

栄養学に偏重したり、食べ物を趣味化したり、



ないし軽視する時代風潮は、異常ではありませ  
んか。

食べ物を、単に食生活とか食文化といった角  
度からとらえすぎているのも、最近の流行のよ  
うです。

食べ物のいのちに感謝し、人格を磨き、世の  
ために尽すという仏教の食べ物に対する基本的  
なところがまえを、あらためてふりかえってみ  
る必要がありますかと思ふことしきりで  
す。



# 『ある日の佛蹟行脚の旅』

十二月二十一日、晴

インド留学僧

安井隆 同

小鳥の囀りとともに目を覚す。朝五時三十分頃、ここはナーランダの中国寺院である。印度には現在、中国人の僧はほとんど住んでいないのでタイの留学僧が留守番をしていた。暫く庭の手押しポンプで洗面、そこにあった空缶に水を入れ村はずれの道端で大便を……事後処理は印度式、右手で空缶の水を後ろから尻の谷間に流しながら左素手で拭くのだ、一見原始的で不潔に考えられるこの方法は慣れるととても気持ち良く爽やかに感じる。あたりはまだ薄暗く印度とはいえ冬なので肌寒い。二、三人の人が近くで同じように用便を足している。

寺に帰り本堂の庭の草の上でタイの留守番僧と二人で朝食に紅茶（チャイ）とビスケットを戴く。朝食の後散歩しながら近くのヒンズー教の寺院にお参りしたが僧らしき人の姿は見えなかった。ナーランダ大学跡に行き草の上に寝転んでくる。帰り道路では子供達が縄を丸めてボールを作り、素足でクリケットに興じていた。犬が見知らぬ私に吠えかかり後を追ってくる、あまり気持ちいいものではない。

十一時半頃、中国寺に帰つてくると、印度人の老婆が昼食だと呼びに来る。昼食には、ご飯にジャガイモとカリフラワーのカレー、それに

カボチャの花と蔓の塩茹でを戴く。カボチャの花や蔓を食べたのは、初めてのことと何んとも言えぬ……味だ……。タイの留守番僧の食欲旺盛なものには驚く。見る見るうちに私の三倍以上は軽く平らげた。インド、ビルマ、タイ、スリランカなどの小乗佛教の僧は、十二時を過ぎる

と食事を取らず、一日二食である。それで昼食には沢山、夕食の分も食べるのかも知れない。もう一晚ここに泊まろうか……、パトナに向って歩ゆみ出そうかと迷ひつつ……、十二時半ごろにナーランダを後にする。ナーランダからパトナの方に向っては、見渡す限りの平野が



放浪のサドゥ（聖者）

つづく……………。ただ地平線を見つめてゆつくり歩む。歩いて歩いても同じような風景……………赤茶けた平野……………。

親切に車を止めて、『何処まで行くのだ。乗って行け』と声をかけて下さる人、『私の家はこの先だから休んでいって下さい』と連れて行って下さる人、行きなり『何処から来た、何しに来た、名前は……………』と尋問する人、不思議そうに見つめ、ニッコリ笑顔で通り過ぎる学校帰りの小学生、口の中で草を噛みながらじっと私を見つめる手。風に揺れ手を振っているかのように見える野の草……………。

村人に、牛に迎へ送られ、旅に行く

ほほ笑めば ほほ笑み返す

村人も 牛も 野の草も……………。

どれほど歩いただろうか、道端にポンプを備え付けて畑に給水している。私は早速、下着を脱いで洗濯、水浴させて頂く。すつきり爽やか

な気持ちで、裸の上に墨染めの衣を着、洗濯した下着は、日当りのいい草の上に乾し、木影で網代笠を顔の上に被ぶせ昼寝する。

空はかぎりなく青く高い……………。

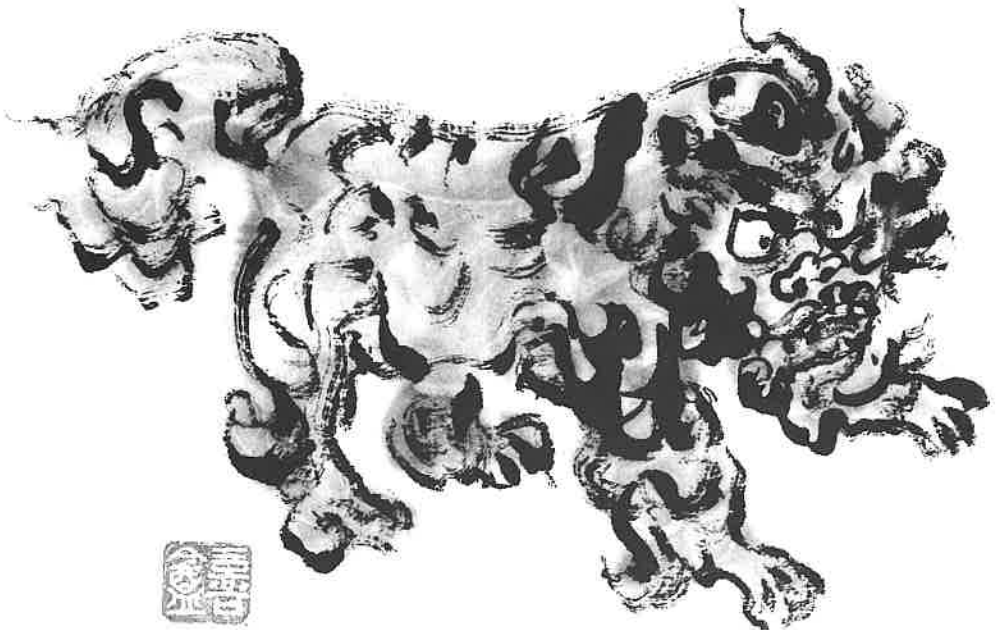
道はかぎりなくつづく……………。

夢はかぎりなく広がる……………。

目を覚ますと、禪は乾いていたので確かり紐を締め、シャツは半乾き、そのシャツを頭に被ぶつた網代笠の上に載せて乾かしながら歩ゆみ出す。それにしても、この辺はともハエが多い。牛や人の糞に群がっていたハエが、そのまま直接私の顔や手に飛んできて群がる。払っても払っても、追い払いようが無い。気持ちの良いものではない。一所懸命ハエを追い払いながら歩いていたが、諦めて歩み出すと、ハエが私に『そんなに嫌がるな、牛や人の糞もあなたも、私らから見れば同じさ。』と言っているように聞えてきた。ナーランダもハエの多い所だった。

先ほど洗濯したシャツと褌に何か蚤か虱の糞の  
ようなものが付いていた……。あれは何んだろ  
う……。どうしてだろう……。

ビハールシヤリフという町に着いた。印度の  
多くの町がそうであるように、この町も人、牛、  
人力車、自転車、自動車、牛車、馬車、バス、  
トラックでごった返し、騒々しいことこの上な  
い。バザールでミカン六ケ、モンキーバナナ八  
本、計八ルピー（百六〇円）を買い、食べなが  
ら歩く。これが夕食だ。もう太陽が沈む、速く  
今夜の宿を求めなければ……。そう思いながら歩  
いていると、一軒の医院の前で、医者らしき人  
が私を手招きする。よし、ここで一夜の宿を乞  
おうと思ひ行ってみる。ビハールシヤリフを過  
ぎた、ソーサライという町のマニスクリニック  
という医院だった。外科医院らしく怪我をした  
数人の人が横たわっていた。私がこの医院の表  
で、日記を書いていると、二十数人くらいの近



くの印度人が、ものめずらしそうに取り囲み、日記を覗き込んでいる。ひとりの人が、不思議そうに、これは何語かと聞く、日本語だと答えると、声を出して読んでくれと言ふ。私は、下手な字の日記を少し読んだ、みんな初めて聞く日本語を興味深そうに聞いていたが……そのうちに誰れからともなく笑い出す。どうせみんな日本語を聞いても分からないので、私の下手な走り書きの日記でも少しも恥かしくない。通じないということは良い事もある。

このの医院のラビンドラ・プラサドという医者は、ここに泊まるよりも、近くにヒンドウ教徒のダラムサライという巡礼宿があるからと案内して下さる。もう日もとつぷり暮れている。真つ暗で電気も無く、あまり人の気配も感じない、何んとも不気味な所である。

大声で何度呼んだらう、老いた不愛想な番人が出て来た。一夜の宿を乞うと、黙ったまま

暗がりの中の一つの部屋に案内して下さる。電気はと聞くと、そんなものは無いと言ふ。案内して下さった医者は、ローソクを持って来るように頼んで下さった。暫くすると番人が一本のローソクを持って来た。部屋には、まったくものといふ物は何ひとつ無く、埃りと部屋だけ、三十畳くらいの広さだろうか。薄気味の悪いところの上ない。案内して下さった医者は、私にここで大丈夫ですかと聞いて下さる。私は内心、心細そかったが笑顔で大丈夫ですと感謝の礼を述べた。ひとりになり、コンクリートの床に寝袋を広げ中に入り寝転ぶが、蚊の集中攻撃で眠れない。顔に風呂敷を被り、その上から網代笠で覆い眠る。耳もとでは、ウーン、ウーンと蚊の羽撃く子守歌……。よろこびと感謝で眠り、夢を観る。

合掌

## 「未来社会の仏教と私」

早田 啓子

人間がどのようにして誕生し、どこへ向かって進んでいるかという問いは人間が自己自身に問う永遠の命題なのかもしれない。そしてこの命題が現代ほど深刻に我々に問われている時代も、かつてなかったのではなからうか。勿論、過去の古代文化や未開文化を見ても明らかのように、人間は生きていく上で精神と肉体のバランスを工夫しながら生きてきたわけではある。

紀元前五百年頃に出た世界の宗教的天才たちは「言葉」と「肉体」の均衡の大系を整理した。その方法はある意味でその後二、三千年間の人類史の一面を各々の宗教において決定づけたと

もいえるかもしれない。しかし今やわれわれにとって問題なのは、この二十世紀末をいかに生き未来へ繋げるかという切実な問いであろう。つまり人類は自らがつくり出した高度に発達した文明の中で、それを支えるに足る統合的な思想的基盤の生みの苦しみに直面しているといっても過言ではあるまい。

かつてわたくしはこの問いを自己の問題として強く意識し、歴史への認識を確実なものとすることを願った。それは丁度、第二次大戦が終わり日本の昭和三十年代から始まる高度経済成長の時期と重なる。その頃の多くの若者がそう

であつたように、わたくしの足も必然的にアジアへ向かつた。まず最初に訪れたのはバングラデシュであつた。この国では喧噪と混乱と貧困が渦を巻いているような強い衝撃を受けた。死んだ子を抱えて道にしゃがみ込んで、ボクシーシ（お恵みを）とせがむ母親、また路上で病氣や飢えのために多くの人が植物が枯れていくように死んでゆく光景を目にした。かたや日本を含めた文明国は、その飽和した社会状況の中で内部的崩壊の兆しすら感じられた。わたくしはそこで人間とはいつた何かと問わざるを得なかつた。人間が生きていることや死ぬこと、日本が選択した戦後史、富の分配と貧富の格差、近代社会が内包する病弊等々。それでもわたくしはこの時代でできる限り自分の足で歩き、自分の目で見たものすなわち自分が自ら実感したことだけを「言葉」にしようとした。つまり「もの」と「観念」が遊離したまま言葉を使うことを

恐れたからである。

いつたい、われわれは「近代」というものをどのように考えているのであろうか。十七・八世紀のイギリスやフランスのブルジョア革命、それに続く産業革命によつてヨーロッパは完全に資本主義社会を実現していった。日本の近代資本主義社会の実現はさらにそれより遅れることになるが、アメリカを含めた戦後世界史の流れは確実に近代化を推し進めていったのである。承知のように近代性とは合理的精神の追求であり、それが精神的なものであれ物質的なものであれ、パターン化され規格化されたもののみを優先するという価値観である。そしてそれはアメリカ社会の持つ現実的成功⇨欲望の追求と相俟つて、特に戦後一層拍車がかつたのである。そこでは当然のことながら人間存在につきまとう不条理や不合理性といった人間性は切り捨てられ、人間疎外の壁に直面せざるを得な



くなくなった。ヨーロッパを始めとしてアメリカや日本を含めた近代国家の歩んできた道は、その物質的豊かさと引き換えに人間性の喪失と自我の孤立化を招いたのである。日本に限っていうなら、アジアの中で明治以来の近代化の歴史の中でアジアの孤児となりまた、昨今は世界の国々の中で孤立化を深めておりそのために日本は自らの姿さえ、はつきり掴めなくなっている状態である。

わたくしはアジアを歩いてきた時、つとにこのような現代文明のありよう、近代化の詮ずる所を見つめながらアジア的な思考法ひいては仏教的思考法に目を向けていた。もとより仏教の基本的立場は、根本命題としての人間存在のありようを分析し認識するところから出発し、欲望をコントロールすることによって自己を発見することにあり。わたくしは新しい歴史の幕はやはり東洋的な思惟の中にヒントがあると考え

るものである。そしてそれは自と他の激しい攻撃を通した鋭い対立によって対象を否定する思想の対極に位置する考え方である。

さてわたくし個人の現地点での立場を述べるならば、目下のところインドの仏教美術の研究を開始している。思想を基盤に置いた仏教美術の表現の研究を通して仏教の真髓に迫ろうとするものである。わたくしは仏教の一つの宗派に属するわけでも、また修行をしているわけでもない。謂わばこの研究が修行の場であるといつてよいかもしれない。仏教表現の発露たる美術表現を研究し、表明することによって仏教の考え方を理解し普めようとするものである。

二十世紀末、人類の未来に何が待ち構えているかはわからない。はつきり言えることはわたくし自身が、その中に一人の人間として生きてゆくということだ。それは現代文明を視野に入れた、人間性回復への新しい道を模索すること



とであり、主体的に歴史に働きかけて生きてゆく自己を全面的に己に引き受けて生きてゆくことに他ならないと考える。

# アメリカ禅仏教のこと覚え書き —MT・モナストリィの生活から—

アメリカ留学僧 島崎義孝



## 一 はじめに

本年四月上旬のある日、ゼン・マウンティン・モナストリイ（以下、ZMMと省略）の一行十人はニューヨークのケネディ空港を飛びたった。彼らは永平寺・総持寺といった日本の禅宗を代表する本山を参拝するとともに、同モナストリイ縁故の寺院や人々をたずねるために、およそ一週間の滞在日程をフルにつかっけて日本中を動きまわった。そして帰国する彼らを追うようにしてアメリカ入りした私が、こんどは彼らから生活全般にわたる薫陶をうけているわけである。そのひとりが日本滞在中の印象を私に語ったところによれば、方々で歓待をうけ、美しい建物や庭園を鑑賞し、日本の洗練された伝統文化を目のあたりにし、あるいは仏教行事を实地に参観することができて、全体としては快適

な旅行であった。しかし、不満がないわけではない。それは、日本にはあれだけ多くの禅宗寺院があり、僧侶も大勢おられるのに、「接心」というものに招じられたり、それを行っている機会には出逢わなかった。自分は日本の禅僧たちと混じって本格的な接心に参加してみたかった、というのが彼の希望であった。

専門道場の接心に所詮は一介の外国人旅行者でしかない彼が、いきなり参加することは不可能だったとしても、どこか適当な場所を提供してやれなかったものか。十分な旅行準備が可能だったとは決して言い難い彼が、このような不満を抱いて帰国したことは誠に気の毒であったと思う。日々の生活を共にしている私としては同情せざるをえない。

そして注意したいのは、上のような不満はひとり彼から発せられるのではなく、旅行に加わったメンバーが一様に抱いている感慨であるら

しいことだ。じつさいモナストリーの日常生活を共にしてみても知るのには、彼らが日本の仏教にたいして並々ならぬ関心をもっていることである。今回の日本巡行中に収録したビデオテープ五十本、写真フィルム七十二本、録音カセット・テープ四十七本という数字は、旅行者の単なる記録の域を越えている。それはむしろ取材といった方が適当だった。こんなぐあいだから、日本で放送された△禅寺の生活▽とか、△東西靈性の交流▽といった類の番組は彼らも先刻承知しているし、それ以外にもメンバー一般の利用に供する資料は相当数たくわえているらしい。太い手巾をしめた私が臨済宗僧侶であることを、わざわざ説明する必要はまったくないのだ。

## 二 プロフィール

ところでZMMとは何か。

現在全米の仏教グループは四・五百とか、あるいはそれ以上ともいわれているが、ZMMは禅仏教関係では最大規模を有するもののひとつに数えられる、ロサンゼルス禅センターの支部的存在である。ニューヨークの中心部からハドソン河に沿ってキングストンまで百二十kmばかり北上し、さらに西へ三十kmほど折れたトレンパー山のふもと、エソプス川とビーバークル川の合流点に位置する。数年前、音楽フェスティバルで一〇〇万人近いといわれる若者を集めたウッドストックのすぐ近くにある、なんの変哲もないアメリカの田舎町だ。あたりには点在する住宅のほか山と森林しかない。

ZMMの中心をなすA字型の建物はもともとカトリック教会で、一九二七年の建造になるという。こんなへんぴな場所にあるのは大都会の喧噪を離れて、一時的な引きこもりに適しているからだろうか。それがZMMの手に移ったの

は一九八〇年というから比較的最近のことだ。

今日でも十字架にかけられたキリスト像が建物の正面外側に放置されたままで、取り除かれる気配はない。説明でもなければ、全体の雰囲気からして誰しもキリスト教会だと思ふにちがいない。この建物から山の方にむかって、そのままゴルフ場にもなりそうな芝生のゆるい斜面がひろがる。途中から大ぶりの雑木林に覆われ、それが山頂まで続いているらしい。雑木林のなかにはあちこち無愛想な機能本位のキャビンが建てられており、朝夕の坐禅に通う人たちがここで思いおもいの生活をおくっている。積雪の多い冬場などは通うのに随分困るそうだ。いわゆる境内地に相当するのは二百エーカー、日本的にいえば、およそ二四万坪というから、一ヶ寺の占める面積としてたいへんな広さだ。それでも下を通る車の音が聞えたり、近隣に人の住む気配がよくわかる。狭い土地に角をつきあわ

せるように生活しているわれわれには見当がつかないが、こんな広さもアメリカ生活に慣れた人々にとっては別段意に介するほどのことではないらしい。同じニューヨーク州にあり、キャッツキル山をはさんで西に位置する臨済宗系の大菩薩禅堂を訪れる機会もあったが、ここは一六〇〇エーカーあるという。ゲートから禅堂までいわゆる参道に相当するものが三km以上もあり、途中は森ばかりで人家はいっこうに見当らない。車に乗り慣れたアメリカの人々さえ広いと感じるのはこのあたりのことらしい。

因に乗用車はこのあたりでは必需品で、ぜつたいに欠せない。どこからみても決して車の運転などできそうにないおばあさんがフルスピードで走り去ったりする。塗装がはげ、板金が腐蝕してボロボロになったぐらいいは序の口で、片方のライトがなかったり、計器類がこわれているのにもよくお目にかかる。最も興味深いのは

彼らがそんなことを意に介してない風にみえることだ。それでも経済観念は至極あたりまえで、燃費がよく故障も少ないとかで左ハンドルの日本型車はしごく評判がいい。

モナストリーの建物は一階がオフィス、典座（台所）、食堂兼リビングルームだが、他にも倉庫、作業道具の収容場所にも使われている。長椅子、長机が中央にそれぞれ二列に並べられ、ふつうの食事はここで済ませる。さきに触れたキリスト像の真下は円形に段々がついていて、それを降りきつたところに両開きの重いドアがあり、すぐに黒ずんだ大きな暖炉が視界にとびこんでくる。ふぞろいなソファがあるかと思えば、足がいたんで今にもとれそうなロッキングチェアが割り込むようにおいてある。お茶といっても主にコーヒーだから、それ以外に各種のティーバッグがいつも用意してあり、休息の間やレスト・デーにも皆よく利用している。床

はオフィス以外はリノリウム敷きで、見た目には清潔をうだが、土足で出入りするので汚れるのははやい。仏教のプラクティス（修行）のための施設であり、はじめはキリスト教の教会だったとはいえ、飽くまでも仮物といった感じで、雑然とした印象を受けるのは致しかたがない。節目だらけの松材の厨子におさめられていた仏像が、わずかに仏教のかおりを漂よわせている。

二階は元の礼拝堂らしく、今はすべて木の長椅子をとりはずして板敷きのホールになっている。三階の廊下から見おろすと窓の小さなうす暗い部屋にしか見えないが、じつさいにここに立つてみると随分ひろく感じる。たぶん柱というものをまったく使わないからだろう。正面の一段高い△祭壇▽には仏陀像が安置してあり、三具足しか使っていないのはかえってすがすがしい。禅堂としてだけならこれ以上必要はないのだが、どうじに本堂でもあるからだ。五十人

は充分に坐れるようにできている。坐禅のときに曹洞宗では円形のお厚い坐蒲というものを使うが、ここではその下に方形の坐蒲団を敷いている。臨済宗の専門道場などで単蒲団といっているが、長方形の蒲団を三つ折りにして使うあのやり方との中間的な形態といつてさしつかえないだろう、日本では臨済宗、曹洞宗といえど一部を除けば境界ははっきりしているが、アメリカでは日本に倣って一応、何々宗とはしていても日本のそれとははっきり異なる。現にこのモナストリーのアボット（任職）も副アボットも日本の曹洞宗の本山で《瑞世》といつて正式に曹洞宗僧侶の資格を得、しかもモナストリーじたい認可の《参禅道場》だが日本のやり方とは全般的にいつて明らかに一線を画している。それは臨済宗を名のついても同じことだ。

話は少し跳ぶが、禅仏教がこんにち多くのアメリカの人々に関心をもたれるようになった背

景には、臨済宗で伝統的な教育方法として採用されてきた《参禅》が大きな役割りを果していると思う。エルンスト・ベント氏の言を待つまでもなく、禅仏教を西洋社会に広く伝えたのはほとんどと言ってよいほど臨済《系》の人々だった。俗身であつても出家者と同じように悟りの道を歩むことのできる形式を仏教に与えたことが、従来から禅仏教の特質といわれてきたが、まさにこの点が出家仏教たらざるアメリカの仏教に適合してきたといえるし、さらに宗教的な経験の浅い人にも、たとえそれが禅スノミビズムといわれようとも、公案の奇抜さは関心を示すのに充分の魅力があつたと思う。しかも参禅という方法は階段を一段ずつのぼつていく楽しみ（一種の大きな誤解も含めて）を彼らに与えたのではないか。それをしも《アメリカンドリーム》になぞらえるつもりはさらさらないが、この方法はいたく彼らを刺激したはずだ。こん



なことを思いつくのはアメリカに来てから色とりどりの帯をしめた空手マンや柔道マンをしばしば見てきたからにほかならない。日本ではどんな段階があるのか知らないが、十種類もの色帯を使うことはあるまい。しかしアメリカではこのやり方は彼らに目標を設定させることで、練習効果に随分ちがいのあることをある指導者から聞いた。心理的には参禅についても同じことかといえるように感じる。ヨーロッパで数年前、日本の臨済宗のグループが《ヴィジブル禅》として、墨績をはじめ弓道、剣道の型を披露して好評を博したというのも似たような理由からではないだろうか。こうしたやり方がいいのかどうかについては異論もあるが、少なくとも人々の注意をひきつけるのに一定の役割をはたしてきたことはまちがいない。只管打坐や仏教儀式だけでは、継続して多くの人々を捉えていくことは難しかったのではあるまいか。要するにア

メリカの禅仏教はどちらの名称を使っていたとしても、混合型であり、しかもそれ以外の宗教の影響も多分に受けているのである。中国から日本に伝えられた禅仏教が日本の変形を加えられてきたように、現にアメリカでも同じことが行なわれている。

さて、Mtモナストリーの禅堂兼本堂は接心のときには食堂にもなる。広い境内をもっているにもかかわらず一室三役というのはいかにも手狭な気がする。坐りづめの接心の経験のある人にはわかると思うが、時間がくればそれぞれ本堂や食堂に出頭するのもいい運動になるものだ。ひとつところに坐り続けるのは苦しい。

そして二階の一部分と三階は長い短期の滞在者の私室にあてられる。各部屋はきわめて簡素でシングルベッドと小さなテーブル、椅子が置いてあるくらいだ。長期の滞在者になると荷物もしいに増えてくるが、1週間程度の接心だ

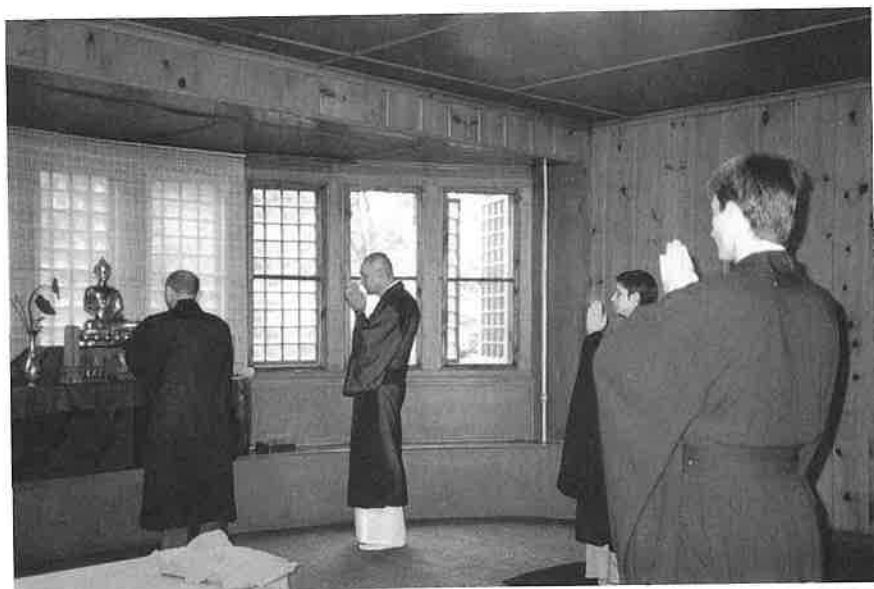
けに来る人だと手さげカバンひとつというところもある。なるべく質素を心がけるのはブデイストの心構えだとこの誰かが言っていた。しかし日本の道場とは異なって、もちろん男女とも別々の部屋だが、同じ建物の中で生活する。プラクティスの道場としてそれで問題はないのかと思っただが、すでに数組のカップルがあるらしい。逆に離婚後ここに来るようになったという人も結構たくさんいるということだ。

60年代のいわゆる対抗文化のひとつとしての仏教は今日どうなっているのか。それは伝統的な価値観の動揺に一定のすじみちをつける役割を担わされていたはずだが、むしろ今日のアメリカの価値混乱はより具体的な段階に入ったのかも知れない。伝統的な傾向である外国人の流入は絶え間なく続き、これひとつさえアメリカ人としてのアイデンティティを脅かすのに充分なインパクトであろう。加えて国際的な政治力

の相対的な低下、経済的な方面での長期的凋落、そしてより日常的なレベルではAIDSや離婚の問題などそこに生活者として住んでみなければ実感としてわからない問題を数多くかかえているらしい。以前ロス・アンジェルスの接心で一度に三〇〇人ちかい参加者があったという。会社の研究会や大学の接心ではない。それぞれ個々の意志による参加だ。その接心の主催者側にいた人が「あれはクレイジイだった」というのだが、禅仏教に関心をよせる者のなかで、いわゆる白人のインテリ層の占める割合が断然多いといわれてきたが、このことはいったい何を示すのだろうか、坐禅が彼らの失われたアイデンティティ確立のきっかけになるとしたら、それは不幸にもアメリカ人としての帰属意識から遠ざかるものではないのか。接心の週末から日曜日にかけて俄に数を増す彼らを見ているときまざままなことを考えてしまう。



バンティン・モナストリイ



ゼン・パ

## 三二 日常のスケジュール

ZMM は名称からしてもわかるように修行の場とし自らを位置づけている。いっばんに日本の専門道場で使う用語は、このモナストリイに限らず、坐禅をしているようなところでは、アメリカでもたいい通用する。ことばの不自由な私のようなものでもその点についてはとくに問題はない。たださきにもふれたように、ここでは飽くまでも日本の両禅宗を基本としながらも、アメリカ的コンテキストで行うと明言しており、その点形態的な類似性から日本的な観念を持ちこもうとするのがわれわれには結局なじめない最大の理由だと思われる。

まず年間のスケジュールから述べると、三月と九月からそれぞれ三ヶ月にわたる ANGO (安居) があり、その期間中は言うまでもなく

SESSIN (接心) がくりかえされる。毎日の生活の時間割はもちろん季節によっても異なるが、今は三月からの安居の概略を示そう。

四時三十分

起床

七時〜六時三十分

坐禅

六時三十分〜六時四十五分

朝課

六時四十五分〜七時三十分

朝食

八時十五分〜十二時

作務

十二時十五分〜十二時四十五分

昼食

二時〜四時

作務

四時〜四時四十五分

坐禅

四時四十五分〜五時

晚課

六時〜六時三十分

夕食

七時三十分〜九時

坐禅、後消燈

晚課と夕食のあいだに一時間あるが、これは

アートプラクティス、ボディプラクティスのために費される。つまり各人がおもしろい運動や美術活動をするのである。内容には別に制

限がないようだが、彼らが現在行っているものは運動系では合気道、太極拳、空手、ジョギング、美術系では墨画、書道などで、これなども《ゼン》を意識したものでだろう。

上の時間割からみてもわかるように、決して敵しい内容ではない。かといってゆつくりできるほどの余裕があるわけでもない。三時の経の時間が短いのは般若心経(英訳)、消災咒(しょうさいしゆ)、大悲咒など短いお経を一卷読むていどだからである。英語で読みあげられる回向も慣れてみるとかえってはっきり意味が理解できるので好しい。

日曜日にはまた別の時間割がくまれている。起床は二時間近くおそく、逆にお経の時間が長くなる。この日は坐禅もちろんあるが、ほかに坐禅の後で法話(ダルマ・トーク)があり、外部のメンバーも多く集まる。正午にひと通り行事が終了し、昼食をとりながらの歓談風景が

方々でみられる。キリスト教会の日曜日の礼拝に行かなくなった人々が今度は《仏教寺院》に来るようになったともいえそうである。午後から火曜日の午すぎまではHOSAN(放参ほうさん)で、たまった用事をすませる者や遠くへ出かける人もある。なんのことはない週休二日制なのだ。またSesshinについても臘八大接心などと人を驚かすようなことを言わずに、時候がよくなる四月にチェリーブロッサム接心といたり、五月末の戦死者追悼日にあたるものをメモリアルデー接心というのめいかにもアメリカらしい。坐禅の時には並行してインタビュがある。これは臨済宗という独参で、ここの実質上の責任者はアメリカ人だが曹洞宗の僧籍をもつ一方、《KOAN》(公案こうあん)のプラクティスをあわせて行っている。このことは前に少し触れたZCLA関係のセンターで必ずみられる現象である。それらの中心であるZCLAには

△Roshi▽（老師）と呼ばれる日本人僧がおり、彼じしんが曹洞宗に属しつつ参禅を修行の方法としてとりあげていることから、弟子もそれに倣っているわけだ。弟子達のうち数人はすでにいわゆる飽参底で、アメリカやヨーロッパ各地でそれぞれの施設の責任者として活動をづけ、メンバーからは△Sensei▽という名称で呼ばれている。ZMMでもそれは同じである。

参禅といえたいはいはわずかの時間ですんでしまうものとはばかり思っていたら、ここではひとりずつの所用時間がずいぶん長い。いぶかしく思い、あるメンバーに理由を尋ねてみたことがある。すると住宅のトラブルとか交通事故の処理、夫婦間や子供の教育問題の不満を、皆述べたてているのだろうということだった。もちろんこれがすべてではないと思うけれど、毎日の彼らの様子を見てみると、型通りの公案のやりとりではすまないかもしれないと考えてし

まう。とにかく自己主義が強いのだ。これもメンバーで離婚経験のある男性が、アメリカの女は利己的で、はじめはいいがすぐに喧嘩になってしまうとぼやいていた。われわれから見るとどちらも似たようなものだと思うのだが、彼にとっては他人事ではすまされない。日ごとに生じる身の出来事をどう解決するか。これは彼にとってはまさに生きた公案なのである。いずれにしてもアメリカで他人の参禅の相手をしようと思ったら、公案の調べのほかにサイコセラピストの資格もいるようだ。

ZMMに来て興味深く思ったのは△TAN-GARYO▽（旦過寮）という制度を設けていることだ。これはもとより日本の専門道場に入門するさいの旦過寮を模したもので、この責任者の弟子になるための通過儀礼である。庭詰などはさすがにないが志願者は朝の五時から夕方五時まで一室にじっとしたまま閉じこもらなけ

ればならない。年間を通じて毎月中旬の週末に行われるらしい。そして一年後には受戒を受けることもできる。このときに黒の絡子をしるしとして与えられるが、いわゆる俗身のままでも、短かければ六年目でSHUSO（首座<sup>しゅせ</sup>）になることがある。その間にも細かいいくつかの位階があつていずれも名称がつけられている。一方、得度を受けて出家というかたちをとらせることもあり、別にただステューデントと呼ばれるだけで受戒もなしに生活している人たちもいる。

言うまでもないがZMMで行っているような細かい位置構成はここだけのものであり、同じZCLAグループでそのまま通用するわけではないしつまり全米にある他の仏教関係の集団ではほとんど意味をなさない、にもかかわらず彼らが熱心にこれに従っているのはどういうわけだろうか。私などから見れば、互いに顔と名前が一致するぐらいの小さな、しかも機能性や能

率性を重視するわけでもない集団では必要のない内部構成だと思ふのだが、これなども柔道や空手の帯の色と同じ関心からだろうか。

#### 四 接心のこと

彼らはそろえて坐禅が好きだと言い、じつさい熱心にとりくんでいる。休息の日とか、消燈後もしばらくの間坐っている姿をしばしは見かける。坐禅をはじめてまだ日の浅い人は、ほとんどふだん着のままだが、あるていど時間を経たものはグレーの、キリスト教の修道士が着るハビットのようなものをひっかけている。これは文字通りひっかけるといった感じでめんどうがない、ただ袖を通し、からだの前で紐をむすぶだけだからだ。最初ここに来たとき一炷四十分という長さにもかかわらず、経行<sup>きんぎょう</sup>のときにも坐を立たない人がいるのには驚いてしまっ



た。聞けばヨーガの練習も行っているらしい。しかしそれにしてもハビットの下は厚手のジーンズだ。生活習慣のなかで膝を深く折り曲げる姿勢の少ない彼らが、あれでよく長時間坐っていられるものだと感心した。脚を曲げたときに膝の内側が厚い布で圧迫されて不自由なはずである。しかし、よく観察してみると結跏趺坐している者はひとりもおらず、たいていは半跏趺坐のまままで済ましている。半跏もできない人は、折りまげた太腿とふくらはぎの間に十センチあまりの板をはさみ、その両端をやはり板で小さな蒲団とかパットみたいなのをいくつも用意している者もいる。ささえる正座椅子みたいなものを使っている。椅子ずわりの坐禅も欧米的というべきだろうか。

坐禅をするためにわざわざ日本に来るような人たちは、初めはできなくともしだいに慣れて、たいてい数年後には結跏趺坐しているようにお

もうが、環境のせいだろうかあえてそれを勧め様子もない。余計なこととは思ったがあとで専従スタッフのひとりに、フル・ロータス(蓮<sup>だ</sup>華<sup>け</sup>坐<sup>ざ</sup>、結跏趺坐<sup>けつかふざ</sup>)が安定して理想的だ、現に釈尊像でハーフ・ロータス(半跏趺坐<sup>はんかふざ</sup>)などはひとつもないだろう、結跏趺坐にすべきだと言ってやったら、別に問題はない(ノー・プロブレム)と軽いなされてしまった。いや、それこそいらぬおせっかいだ。つまらぬ口出しをするなどという返事だったのだろうか、ことばの不自由な私にはよくわからない。それにしても一般むけのパンフレットはまず坐禅の心構えから始まり、準備体操の説明をへてフル・ロータスに至り、坐からの立ちかたまで懇切に行っているのはどういうわけだろうか、あれは単なる案内書にすぎず、努力目標というわけではないらしい、経行のときに苦もなくすつくりと立ちあがる大部分の人たちを見ていると実に奇妙におもう。

坐から立つさい足のしびれでヨロヨロしたり、もたつくのは彼らの目には随分ぶざまに映ららしい。とにかくじつとして動かないでいることが、この人たちの坐禅に対する第一の関心であるように私には思える。

そんなこともあつてか概して坐相は悪い。初心者が多いせいもあるが、それはしかたがないとして、数年間ここで生活している者でも坐相にはほとんど注意を払っていないようにみえる。細かな様々な癖、少しずつちがう体勢、それらは瞑想の姿というよりはむしろ思索の型といった方がふさわしい。たまにリーダー格の者が検単にまわつても、よほどひどい坐り方をしていないかぎりまず矯正しない。じつさいいちいち坐相を直していたらきりがないほどなのだ。もつとも専従のリーダー達じしんわれわれの目から見ると信じられないほど無頓着に思えることがある。たとえば△叉手当胸▽をどうい

うわけか、いつの間にか腰の高さで両手を支えるように指導しているようなあんばいなのだ。

また、食事のときにも気にかかることがある。曹洞宗の道場で行うのと同じように、ここでも接心中のフォーマルな食事には応量器か、それを模した数種類のボールを使っている。今日の臨濟宗で用いている自鉢は応量器の簡略化された形態だとおもうが、その自鉢しか知らない私は応量器の扱いの難しさに驚いてしまった。私などにはその手順が必要以上にいていねいだと思うのだが、それは、それとして彼らはみるからに習熟している。英語だが型どおり食事の偈を唱える。メニューは三品で、たいいていのばあいはおトミールか、グレンノーラという穀物に牛乳をかけたものが粥のかわりになっている。

汁椀にあたる器にはリンゴや汗ブドウ、バナナ、オレンジなどヨーグルトであえたサラダ、それに菓物のジュース、だいたいこんなものが

よく出る。日本の道場でも食堂は三黙堂のひとつで無言のまま食事を摂るけれど、決してくつろげるような楽しいものではない。ご多聞に漏れず、このモナストリイでも同じことがいえる。まるで競争でもしているようで、正味の所用時間ばかり短く、というのも曹洞宗の道場でやるように再請（さいしん）（おかわり）というものがなく、最初に一回ふるまわれるだけだからだ。食事のおわりに折水の偈を唱えるが折水をする者はほとんどない。だいたいちりダー格の者が器を洗い終わってしまうと、さつさとかたづけしてしまう。初めての人たちがこれをまねるのは当然だろう。言うまでもないがこの偈も英訳してあるので、文字の意味がわからないわけではない。知られるように折水偈にしる生飯にしる、それらは生きとし生けるものと飲食の功德を分ち合うという願いをこめて行われる。いいかえれば人間にとって一日も欠かすことのできない

《食》という行為を通じて仏道を行っていくことをそれはさすのだ。だとすれば上のような事態は彼らの無理解に帰着するのだろうか。

このことは皆の食事の世話をする典座あたりで一層強く感じた。

他宗門では知らないが、こんにちの臨濟宗の僧堂で典座といえは二、三人の決められた係の者が安居期間中を努め、彼らが中心となって材料の準備、調理、あとしまつまで一貫して行う。多少の異同はあったとしても典座関係の役割は彼らの責任においてなされる。そのさい、出家者は生産活動をせず、また△五観之偈▽△三匙偈▽などに述べられた理由から、△浪費▽を極力戒められている。食堂には、一米粒重きこと須弥山の如し〃などと書いてあって身のすくむ思いをした人も多いだろう。このモナストリイでは一応の責任者においてメニューの作製や調理を行ない、必要に応じてスタッフを補充する。

殺風景な専門道場の典座とはちがって、ここには大型のフリーザー、オーブンもあれば大きな調理台、種々の器具類も常備され、井戸水はなにかわりに、アメリカのほとんどの家庭がそうであるように、ふんだんにいつでも使える給湯設備がある。ところが後のかたづけはじつにたいへんで、洗い物など五、六人でかかっても十分間でおわることはめつたにない。野菜の水切り器、各種計量カップ、数本の包丁、なべ・かま類。ほんの三種類ほどの料理をつくるのに、いつこれだけの器具を使ったかと首をかしげたくなってしまう。こんなぐあいだからひと通りすんでみると流しにはどんぶり一杯ほどの食べ残しが洗剤の泡に混じっているといったこともよくある。だが彼らは別に気にする風でもなく、さっさと捨ててしまう。文字通り法鼓の鳴物入りで、恭しく供えた仏飯が三十分も後には生ゴミのなかに放り込まれるのも諸行無常というべ

きたろうか。△百パーセントの自己集中▽とか  
△ZENが生活を通貫する▽などということばをしばしば口にするくらいだから日常生活全般にわたって様々な注意を払っているはずであるが、どうしようもない観念の相違を感じさせられるのはこういう時である。

もうひとつつけ加えておけば、ある人数以上の人達が食事を共にするようなところでは食器洗い器というのがたいてい設けてある。熱湯のシャワーでまず大まかな汚れを落とし、こんどはそれらを金属性のザルにのせたまま大きなドラムに移し、密封してからもう一度そのなかで四方八方から熱湯をかける装置だ。さわれないくらいに熱いので、ドラムから出して放っておけば自然に乾燥する。ふきんなどもあまり使わず、紙タオルで用をすませるとあとはそのまま捨てる。どれもいかにもアメリカらしいやり方だが、貧乏性の私などはついつい費用の心配を

してしまふ。

## 五 経済・布教活動

ところで、アメリカの宗教団体が経済的な面  
でどのように運営されているのかわれわれにと  
っても関心のある問題だろう。とりわけ大部分  
の仏教諸集団のように比較的新しいグループで  
はどうなるのか。アメリカにおいて、仏教に関  
心を持ち坐禅でもしてみようかという人が増え  
たとはいえ、全体からみればまだ少数だし、そ  
れも流動的だ。ましてあるていど組織化された  
集団となると数も限られてくる。なによりも宗  
教全般が Non belief とか Invisible-religion と  
かいったことばで示されるように、しだいに教  
団とか教義といった表出したかたちをとらなく  
なりつつあるのは事実だろう。個人の好みが大  
きく作用するのである。したがって宗教集団の



応量器



厨子の中の仏像と仏舎利塔

あり方も微妙に変化してこざるをえない。日本の大部分の寺院のように檀家をかかえているわけではもちろんない。アメリカカ社会にも日系の、いわばエスニック的な機能をおびた寺院があるが、ZMMなどはもともと祖先祭祀とはまったくちがった動機からできているモナストリイであるから、法要等からの収入とは無縁である。托鉢は同国では禁じられており、そうした行為をうけ入れる文化的な伝統がなくなるとえ托鉢を行つたとしても単なる物乞いとしか見做されないだろう。かといってキリスト教の修道院のように仏教の修道者として彼らが直接に生産的な労働に携わるわけではないのである。さきにふれた大菩薩禅道などは幸か不幸か大口の土地・資金の提供者を得て、一挙に大規模な道場をつくることができたが、むしろこれは例外で、大部分の仏教集団は運用費の問題で苦慮しているようだ。現にこのモナストリイがそうで、土地



ゼンコミュニティ開山堂

と諸施設の確保のために常時寄付を募っている。一人一日五十セントを数ヶ月、あるいは数年にわたってお願いますというのだが、こんなところにも苦勞が窺える。あるときニューヨーク市内北部にあるカトリック系のホーリイ・トリニティに出むく機会があったが、礼拝堂の改修工事中で、折りしも新品のドイツからとりよせたという大きなパイプオルガンの搬入風景を目のあたりにすることができた。時価三〇〇万ドルという代物だそうだが、アメリカは比較的新しい国家とはいっても数百年の歴史の重みと、いうのはこういうところに出てくるのだらう。大部分の仏教集団など新参者には垂涎的といえるかもしれない、宗教集団として社会的に未だシステム化されていないがために、これらは集団じたいがフル回転しなければならぬのだ。こんなにちしかるべき指導者について坐禪をしようと思えば、わが国には専門道場とか各種の

(ゼンコミュニティにて)





ホール

禅会があるが、従来どおり来る者は拒まず去る者は追わずというのが基本的な行き方だろう。参会費などはまったく考えていないところもあるし、二泊三日ぐらいのあつまりでも数千円を



台所

要するだけで、たいていは坐禅後の茶礼に使う茶菓代ですむ、ところがアメリカでは、わずかに知った範囲では入会案内と活動状況を示すのはあたりまえで、費用まで明確に記してある。



いまはZMMが発行している雑誌△マウテ  
ン・レコード▽の数冊をもとに経済・布教活動  
の両面を簡単にみてみたい。

この雑誌は季刊ということになってい  
いが、実際には不定期である。二十センチ足  
らずのほとんど正方形で、全ページともモノク  
ロームで統一されており、ところどころに挿入さ  
れた美事な写真が文章の効果を高めている。面  
白いのには雑誌発行のためのスポンサーが六十件  
余りもついていることだ。ZMMは△禅芸術▽  
のセンターであることもうたいあげてい  
るところから、美術関係の人々が多く住むウツドスト  
ックあたりとのつながりが深いのである。本文  
は五〇ページにも満たないが、諸方面への發送  
部数は五百部を越える。有名な仏教經典の引用、  
アボット（住職）の法話の要約、さらに行事実  
施の概要、あるいはステューデントと称される  
参加者の感想、寄稿が大半を占めている。今頃

だとニューヨーク州南部の夏もけっこうむし暑  
く、一週間にわたる坐禅だけの接心というもの  
がないかわりに、むしろ△アート▽と彼らが称  
している方面の集まりが多いようだ。マウン  
ト・トレンパーの探索、日本庭園の鑑賞、墨絵、  
ティーセレモニー、キャッツスキル山でのキャ  
ンプ、天体観測などが、いずれも二泊三日の  
日程で行われている。指導者といってもとくに  
専門家がいろいろなくても、いわば素人ばかり  
の集まりなのだが、互いによく意見をかわして  
いる。費用は一切込みで百ドル前後だ。

夏期スケジュールがレクリエーションを中心  
に行われているのに対して、長期にわたる△安  
居▽のばあい全日程の三ヶ月間滞在すると千二  
百ドル、一ヶ月間だけだと五百ドルとなっている。  
他には週末だけの参加コースがあったり、都合  
でしばしば来ることのできない人たちのために  
はホーム・トレイニング・コースと称してオーデ

イオ・テープその他の貸し出しをしたり、どう  
じに販売を行ったりしている。音声だけでなく  
法話の風景をビデオ・カセットにして値段を  
つけているのは、いささか行きすぎの感がない  
でもないが、モナストリーの経営のことを考え  
ればそれどころではないのだ。

ただごく短期間の滞在者にたいしても相対的  
に言えば高額の参加費を徴集しながら、ムービ  
ング・ザゼン（動く坐禅）と称して、けっこう  
重労働をさせているのは、ごくふつうの感覚か  
らすると理屈にあわないと思うのだが、これも  
許されてしかるべきだろうか。外部からの参加  
者が黙々と作務に従事しているのも、モナスト  
リーの台所が苦しいのを承知しているからだとい  
うことにはしておこう。専従のスタッフでさえ、  
食住の費用は支払わないとしても、月額百ドルの  
手当しか出ないのだから不平の出ようもないの  
だろう。

アメリカ仏教の活動は日本ではみられないよ  
うな方面にも及んでいるが、刑務所での坐禅指  
導などはその最たるものといえる。わが国にも  
教誨師とよばれる人たちがいるが、ZMMは女  
性を含む数人のメンバーが刑務所に出むいて受  
刑者と記念写真をとり、しかもそれを上の雑誌  
に載せているぐらいだから、こんなところにも  
それを彼此には考え方に随分とひらきがあるよ  
うに思う。服役者の顔写真が人目にふれること  
などわが国では考えられないことだ。しかもそ  
のうちの何人かは受戒をうけ、どうじに法名ま  
で授けられているという。そんなこともあつて  
か、かつて服役していた人が後になってZMM  
に逗留することもある。臆面もなく、自分はこ  
こへ来る前刑務所にいたと話したりする。周囲  
の人も別に気にとめる風でもない。とにかく何  
かにつけて彼らはたいへんおらかなのだ。ば  
あいによってはそのおおらかさがこちらをいら

いらさせることもあるが、いいことばかりはないものである。

## 六 アメリカ仏教の特質

ここではZMMでの生活体験をもとに、きわめて限られた見聞からだが、われわれの目から見たアメリカ諸宗あるいは仏教の特質について若干ふれておきたい。

### a、諸宗教間の交流

わが国では夢想だにしなかったことだが、ひとくちに言つてアメリカの諸宗教間の相互交流はすごさかんで、しかもごくあたりまえのことのように行われている。周知のごとく第二次バチカン公会議以後、カトリックではユダヤ教の否定をやめ、他宗教間との接触を積極的に深めており、日本でも臨済宗とカトリックに関係する人々が数年間隔で交互に修道の場を提供し

あっている。発生契機においては性格を異にする世界的な宗教が数百年来の外皮を打ち破つて相互に歩みよるといふことじたい、そのころみがいかに小規模なものであったとしても、まさに画期的な出来事であるにちがいない。だが少なくともアメリカという社会にあつては、このような異宗教間の交流はとりたてて宣伝する必要のない日常茶飯のことらしい。

ホーリ、クロス・モナストリイはハドソン河右岸の景勝地ウエスト・パークの一角にあり、ベネテイクト派に属する修道院である。修道院とはいえ、厳格な戒律のもとに共同生活を送る修道士のみの集まりというわけではない。ここでは創立いらい四十八室にもものぼるゲストルームを設置していることからわかるように、六十年以上も以前から修道士以外の外部の人々にも心身の活性化の場を提供してきたのである。われわれが居あわせた集会でも三十人ほどのな

かで、ほとんどの人たちはニューヨーク市内からの来参者だった。組織化された瞑想の方法としての坐禅にカトリックの人々が関心を示していることはよく知られているが、この集会というのもテーマはその線に沿っており、正規の年間スケジュールのひとつなのである。

中庭をはさんで礼拝堂に対した一室で、めいめいが坐蒲や椅子に坐わり、曹洞宗の黒の法衣と木蘭の絡子をまとったZENNIのアメリカ僧が禅宗の歴史や特質を語ることからその集会は始まった。彼は坐禅の実際の仕方を説明してみせ、柘木や引磬の用途、警策を使う意義とその実演を行うというぐあいだ、初めてのことだともみえて参会者は話の内容に強い関心を示していたように思う。修道院の側からは通常ブラックモンクといわれるベネティクトの法服とは異なり、すその長い純白のハビットを身につけた道士が、日本の禅宗寺院での体験をもとに、ベネ

ティクト会派の瞑想と坐禅の比較を行うというぐあいだった。

興味深く感じたのは、年配の夫婦がいるかと思えば若い画家生がいたり、アメリカ中西部からのすでに老人といっているような旅行者がまたまたこの集会のあるのを知って加わったというように、わずか数十人のあつまりであるにもかかわらず年齢層がまちまちだったことだ。しかも一般論としてではなく、自分が坐禅をすればどうなるかとか、日ごろ行っている自分の瞑想と坐禅がもたらす体験はどうちがうのかとか、質疑応答したいが具体的に宗教というものに対する主体的な距離の近さを感じさせた。修道院というからには修道の場にはちがいないのだが、少なくともこのモナストリーに関するかぎり、△開かれた修道院▽を目ざしていることが強く印象に残った。このことはZENNIでみると同様に年間プログラムによっても了解でき

る。各目には多いときは六回、少ないときでも二回はそれぞれ三日間ないし一週間にわたる催し<sup>が</sup>が計画されている。キリスト教に関する内容<sup>が</sup>が中心であることは当然としても、太極拳の実習やハドソン河を探索する会<sup>が</sup>があり、ハイキングを楽しみながら花や石も鑑賞するといったことも行われ、さながら日本ではやりのカルチャーセンターの趣を示している。受け入れ側のスタッフもこれに応じて多彩で、修道士（神学者を含む）のほかには、生物学者・ダンサー・道化役者・小説家・音楽家・精神分析学者<sup>が</sup>おり、件の仏教僧侶もそのなかにちゃんと名をつらねているわけである。日本のキリスト教会のフアカルティに仏教僧侶<sup>が</sup>が加わるとか、あるいはその逆の場合もわれわれの感覚ではちよつと想像<sup>が</sup>がつかないのではないか。

またニューヨーク市のウエストサイド、アムステルアベニューから百十二番街にかけて広大

な敷地を擁するセントヨハネス教会の活動もわれわれの目には奇異に映る。ここはゴシック建築では世界一の規模といわれ、その豪壮な石造美のゆえに参拝者に混じって見学者の列が連日絶えることがない。カトリックではなくイギリス国教会に属する<sup>が</sup>、日曜日の礼拝日にはキリスト教の他の教派は言うに及ばず、アメリカになんらかの素地をもつ宗教集団にも宣教の場を提供している。総勢百人にも達するかと思われ、聖歌隊生の讚美歌を聴くのは初めてだったが、それにも増してアメリカ、インディアン、ユダヤ教、イスラム教・カトリックそれに禅仏教の代表<sup>が</sup>がそれぞれ祭壇にたつて自己の宗旨の説明を行ったのにははつきりいつて驚いた。日本でふつうよんでいるような漢音の般若心経<sup>が</sup>が単調な木魚のリズムにのつて、ニューヨークのど真中の大教会で唱えられようとは、それこそお釈迦様でも夢想だにされなかつたのではあるまい

か。このときはたまたま行われなかったが、日本の神道で用いる白木の神棚の類も準備してあるのだから、私にはまさに驚きとしか言いようがない。しかもどれもが公平に扱われているという印象を強く受けた。

わずかの例から全体を推しはかるのは慎まなければならぬが、みてきたようにアメリカの宗教団体のある種の開放性は通性のようである。それは逆にいえば、特定の宗教の独自性もしくは内向性を強調しすぎると、社会ぜんたいから遊離した存在になりかねないということなのだろう。いずれにしてもアメリカ社会のもつ「メルテイング・ポット」としての一面は宗教活動のなかにも強く現われているようにみえる。

こんなわけで禅仏教といえども他の諸宗教に對して、超然としているわけにはいかない。自然に何らかの改変をうけることになるのだ。

#### b 女性の参加

アメリカの禅仏教について語る場合、見逃せないのは女性が占める比重の大きさであろう。ゲリー・シユナイダーなどは、仏教創始以来女性は本質的には排除されてきたがアメリカにおける女性の仏教へのかかわり方は特筆すべき革命的な事柄だとさえ述べている。彼の指摘をまつまでもなく、歴史的にいつて仏教の世界でも、女性はたえず男性に従属する地位におかれてきた。仏教史において比丘尼教団の成立はその可否をめぐって様々な問題が生じていたし、存在じたい決してわれわれによく知られているわけではない。このことはわが国においても同様である。比重が大きいといったのはここでは単に信者数の多さをさすだけではない。数のことに限ればわが国の今日の仏教儀式・行事への出席は、女性の方が男性よりも多いことかしばしばだが、いま言うのはアメリカでは女性



ゼンコミュニティ経営のベーカリー内部



ベーカリー全景

があらゆる面で同等の位置にあることをさす。たとえば毎日のサーヴィス(勤行)の導師を△尼僧▽がつとめ、他の大勢の男性が随伴するといふ光景はごくふつうに見られる。ZMMなどは女性のリーダーたちによって牛耳られているという感さえあった。そこまで行かなくても、女性がある仏教集団のなかで中心的な役割を果している例は枚挙にいとまがない。

こうした事態が生じるにはいくつかの理由があったと考えられるが、思いつくままに述べる、ひとつはアメリカにおいて仏教は当初から個人主義と万人平等主義とでも言うべき近代的な社会的諸価値のもとに始められたという事情がある。しかももうひとつには△出家性▽とということがほとんどまったくと言っていいほど視野に入っていない。

まず最初の点について、ZCLA関係の禪センターをみた範囲ではタテの人間関係という印象

は、英語ということばの性格からしてもきわめて希薄である。△Ross▽と呼ばれる日本人僧がおり、彼の数人の旧参の弟子は△センセイ▽と呼ばれ、各地でそれぞれ独自の宗教活動を行っていることはすでに述べた。彼らの主宰するセンターでは、彼らの判断とメンバー本人の希望によって、一定の期間をおきながら制度上の段階をふまえていくことも知った。そのさい仏教儀礼や坐禅のばあい、経験のふるい者、僧形により近い者が日本で行われるのと同様のはたらしきをする。いわば修行のいちおうの目安として設けられた階梯の序列が明確に機能するわけである。ここでは男女のちがいによる差異もない。ここにひいた例はその典型である。だがいったん日常生活のレベルでは、日本の禅堂で行われるような権威主義的もしくは形式主義的な枠はとり払われ、対等の人間関係にもどる。われわれには序列と考えられることも、彼らには役割



分担としか観念されていないらしい。そして授戒をすませた者はダルマネーム(法名)で、それ以外の者はアメリカ風にファーストネームで呼び合うといったぐあいである。

また△出家性▽についてはアメリカではまったく度外視されてきたのではないかと思われるほどこの観念は薄く、少なくともアメリカを本拠として活動している禅宗僧侶で国籍・性別を問わず独身でいる人はほとんどないようだ。

ZMMでたまたま二人の女性が授戒をうける場に臨むことがあった。そのさい与えられた△十六の戒▽は最初に仏法僧のいわゆる三宝に帰依することを誓う三帰戒とならんで、十重禁戒の最後の三宝をそしらぬことを約する項目がとくに仏教にかかわることだった。他は一般的な倫理・道徳上のいましめで、ことさらに厳しく規制されているわけではなく、これは戒を授ける側と受ける側とのおのおのの现实生活をふまえ

ての配慮であり、アメリカ仏教の△戒律▽は日本のそれを通り越していつそう寛容なのかもしれない。

こんなぐあいだから女性で髪をたくわえたまま法衣を身にまとい、いっぽう日常生活を営むこともあるわけで、この点では日本の多くの男僧と五十歩百歩というところである。それに対して日本の尼僧方は不当におとしめられているといえよう。出世間の事柄からはそんなことはどうでもいいことなのだろうが、尼僧であることによっては他に仕事をもったり家庭生活を営む力はきわめて限定されており、どこまでも縁の下力持ち的な存在である。しかも仏行にもっとも近いのはこの人たかかもしれない。それはそれとして、アメリカの禅仏教は形態的にはどうであれ、実質的には在家仏教の枠を出るわけではなさそうである。もちろんみてきたように

一方に出家集団があつて他方に在家仏教があるという意味ではない。

もつともアメリカの仏教といえども彼女たちじしんの立場からすると、女性の地位が十分に保全されてきたとはいえないらしい。その反動として十年このかた「女性とアメリカ仏教」というテーマで会議がくりかえされてきたという。このことじたい女性の仏教に対する関心の高さを現していると思うが、どうじに有力な女性指導者が輩出したことをそれは示している。じつさい上のような会議を主唱してきたのはこの人たちであり、なかには女性に対する従属と蔑視を看過しているような仏教のあり方は許せないとしてある仏教グループの指導者の地位をおりた人もいるときく。そして本年にはレノール・フリードマンという女性の心理療法家が、全米で活躍している17人の女性の仏教リーダーたちにたいして行った個別のインタビューを一

冊にまとめたが (Remarable Women, Shambhala)、すでに多くの共鳴者を得ているらしい。いづれにしてもこうしたラディカル性じたい、日本の仏教では部分的にはともかくほとんどみられないことであり、独立心のきわめて旺盛なアメリカ女性が仏教の世界においても今後どのように自己を展開していくか興味のあるところである。

以上きわめて乱雑だが、これまで11ヶ月余り過したアメリカのひとつの仏教グループでの生活体験をもとに思ったままをしてみるしてみた。思いがいや理解の及んでいないところも多々あるかもしれないが、諸先輩の叱正をこいたい。

## 善光寺だより

### ▲横浜を活性化する会で講演

横浜総合システム研究所主催の「横浜を活性化する会」の第一回シンポジウムが、七月五日、六日の両日、様々なイベントを組み込んで行なわれましたが、その前夜祭に於て、当山住職は『アメリカの禅の現状について』というテーマで、一時間半の講演を行いました。

アメリカンプラグマティズムと禅との関りは、物質文明の中に心を埋没させた人間の、本来あるべき姿を浮き彫りにして、好評を博しました。



### ▲神奈川県建設業殉職者合同慰霊祭

神奈川県建設業協会は、六十二年度に殉職された方々の冥福を祈るために、十月一日、善光寺に於て、合同慰霊祭を挙行されました。心からご冥福を祈ります。

### ▲済生会横浜市南部病院解剖慰霊祭

ご生前、献体を申し出ておられた方々の、尊いご遺体が、済生会南部病院において、医学発展のために供せられました。その崇高な魂の冥福を祈る慰霊祭が、十月三十一日、南区公会堂で執り行われました。当山住職が導師をつとめ、多数の参列者が献花、焼香を行いました。

心からご冥福を祈ります。

### ▲光真寺檀信徒会館落慶法要

本寺光真寺では、十一月七日、檀信徒会館の完成に伴い、大本山総持寺貫首・梅田信隆大禅師猊下のご親香を仰いで、落慶法要が成大に行なわれました。

当山住職は、稚児行列の導師をつとめました。

### ▲ご婚約おめでとう！

当山護持会の会長をつとめておられる越石周平氏のご長男・光政君が、新潟県の高松道子さんとめでたくご婚約のはこびとなり、十月二十六日、当山住職夫妻の媒酌で、無事結納がとりかわされました。

結婚式は、三月十八日に帝國ホテルで挙行されます。

ご次男・行政君・ご三男・浩司君も、住職夫妻の仲人です。すでに結婚式を挙げられ、この度の光政君の結婚で、ご兄弟三組の仲人をすることになりました。

どうぞお幸せに！

### ▲全日本仏教会より表彰を受ける

全日本仏教会の財団創立三十周年を記念する式典が、十月七日浄土宗大本山増上寺で盛大に挙行されました。

物故者追悼法要にひき続き功勞者表彰式が行われ、その折、当山住職には仏教興隆に寄与した功績が大であるとされて感謝状と記念

品が授与されました。

記念講演では、「日本仏教の特質と将来」と題した梅原猛先生の興味深いお話があり、参加者全員が、今後一層の精進を誓い合って散会しました。

### ▲タイ留学僧の得度式

留学僧浦田智司師はもう一人の日本僧と共に七月一日に得度式を終え、十月十一日で無事百日の安居を修了しました。今後は、タイ



タイの得度式

国に三年間留学し、上座部仏教を

学ぶことになっています。留学僧の激励と取材を兼ねて渡タイした理事長夫妻は去る九月二十九日ワットパクナムに拝登いたしました。

### ▲本寺光真寺参拝

七月二十一日、例年のように、婦人会主催の本寺光真寺参拝団四十一名は、早朝の東北自動車道をひた走り、光真寺をめざしました。

光真寺にての祈禱のあと、新築された信徒会館で心づくしの昼食をいただき、その夜は川治温泉の東山閣でにぎやかな懇親会が開かれて、旅の疲れも吹き飛んでしまったようです。



東山閣にて

翌日は、ウエスタン村の見学、ブング茶釜で有名な群馬県の茂林寺の参拝と、盛りだくさんのスケジュールを無事に消化して、昼食後、帰途につきました。

来年も、楽しい企画が組まれることでしょう。是非一度ご参加ください。

## ▲小谷氏、旭日章を授与される

当山海外留学僧派遣育英会の顧問を務めておられる小谷亀太郎氏が、この度の秋の叙勲で旭日章を授与されました。

小谷氏は永年タイ国にあって、その間日本人会の理事その他役職を務められ、又、世界仏教徒連盟本部(WFB)事務次官であられる

ことから、現在までに七〇人に及ぶ留学僧や修行僧のお世話もしてこられました。

ふるさとを遠く離れた日本人や、異国での厳しい修行を続ける若い僧たちにとって、小谷氏の存在は大きな安らぎであり、依り拠でもありました。

加えて十月末には新社屋が完成し、当山住職は祝賀と叙勲のお祝



小谷氏と共に

いをかねて、十月二十六日渡タイして再会を喜びました。

永年の小谷氏のご労苦に対して、心から感謝申し上げると共に、皆さまと共に喜びを分かち合いたいと存じます。

## ご寄付御礼

遠藤 清勇	十萬
岩井 文子	十萬
佐藤 憲雄	十萬
柴田 秀晃	三萬
西 光寺	二萬
近藤 保正	一萬
桑名 信匡	十萬
福田 富治	十萬
少林寺拳法	十萬
横浜栄光道院	十萬

始めて拙文を呈上しまして恐縮ですが、御法話を特によく御指導の程、懇願する者であります。御鞭撻下さい。佐藤師は文筆家であり実践躬行の布教師家 小子も管内布教師三期目ですが資料に苦勞をしていて佐藤師にいろいろ資料を依頼しておる者であります。一ヶ月程前 当

山発行の「成寿」を頂戴して拝読させて頂いていただき、早く連絡を申しておつき合いを受けて資料等の好縁を得たく、御多忙な中失礼ですが乱筆を書いている者であります。黒田師の成寿開巻二枚目で御尊姿を拝し、福徳円満御健勝らしく拝するも人格共に兼備の御尊影、仰せの如く宗祖を通して釈尊に還ることの重要性——本当に当該を読ませていただくにつづく慮るものがあります。私も大

いに反省をして毎日報恩感謝の日暮しをしておるつもりであります。老師の御芳名は時折中外日報で閲覧したかと想起しております。どうか御健勝にて御精進を熱望いたします。

黒田老師様

万福小住

村上 博夫九拝

成寿夏号お送り下さいまして本当に有難度う御座居ました。

お元気で御躍役の事と御推察致します。インド特集の珍らしい種々の状況に主人は戦争中の事を想出し種々二人で語り合つて居ります。早いもので息子が亡くなってもう二回目の益になり、又孫の来道を毎日の様に心待ちにして居る状態です。暑さに向います故お体大切にして下さいませ。先づはお礼まで

西川巢治

八月二日從弟の故高橋敏通の一回忌に御世話に相成りました折「曹洞宗在家勤行聖典」並びに「成寿」第七巻を御恵与下さいまして誠に有難う御座居ました。

小生宅は曹洞宗に属し、鎌倉仏教の只管打坐実践の開祖道元禪師の「正法眼藏隨聞記」懷舛編を読んで甚だ考へさせられるところがありました。

毎朝「勤行聖典」を読んでおります。右御礼方々御挨拶申し上げます。

高橋保夫

五月二十八日には拝登させて頂き厚く御礼申し上げます。又、七月六日全福寺さんより夏号が届き重々恐れ入れます。四季折々の厚味のある本は一服の清涼飲料水のように爽やかで尊いお教えを与えて下さいませ。で御恵送下さると有難く拝読させて頂いております。こちらまで本当にすみません。まずは礼状にて、御身

体を御大切になさいますように

高山さつき

小生、上山以来早や二ヶ月が過ぎようとしてますが、何とか無事に日々を過ごしております。そこで簡単ではありますがありますが、今までの修行の経過を報告いたします。

八月二十一日 上山 旦過寮入り

二十三日旦過寮より衆寮へ二十五日より二十九日まで 接心会 九月十日

十九日 待者役 九月二十日

十月九日 殿行役 十月五日

十月十日より堂行役

以上、人手不足の為、色々の役を短期間で覚えねばならず、四九日といえども、ゆっくりと休む暇はありません。

次に、好国寺における一日の行持を報告いたします。

午前四時 振鈴 四時二十分止静  
五時抽解 朝課 六時止静 六時四十分抽解 七時三十分粥座 八時三

十分朝参 九時作務(十時)十時三十分休息) 十一時四十分齊座  
午後二時三十分作務 四時三十分休息 五時晚課 五時二十分止静 六時抽解 六時二十分薬石 七時二十分止静 八時抽解、随坐 九時開

枕、夜坐  
作務は畑仕事の清掃が主で、檀務はほとんどありません。中国禪の僧堂のあり方に近いです。好国寺では、法式をひととおり覚えてしまえば、只管打坐の毎日になるはずですが、ま

た、当僧堂は、原田祖岳老師の系統で、公案禪をとりいれている為、見性者は公案を見ねばなりません。小生、幸か不幸か、八月の接心会で見性させていただき、法式を覚える他に、公案を単提せねばならず、正直いって、今のところは、公案は、負担です。公案は、堂長様がみてくれるのですが、中々、きびしく、頭痛のタネはつきません、とはいえ、当

道場が原田祖岳老師の系統という点とで、前角老師との縁浅からず、この僧堂にきてよかつたと思っております。

ともあれ、まだまだ未熟者で迷惑ばかりおかけしている小生ではあります。修行に励み、少しはまともな僧侶として帰る所存しております。

正田大観

“原稿・おたよりを”

「成寿」誌では「読者からのお便り」の頁を設け、皆様の投稿をお待ち申し上げます。何でも結構でございます。どうぞ下記までお送り下さい。

送り先

横浜市港南区日野町1604  
成寿山善光寺 成寿編集室



# 第五次留学僧募集について

## 目 的

大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先 アメリカ——ロスアンゼルス禅センター、タイ——ワット・パクナム

派遣期間 一年間とするも場合により延長するも可

給 費 派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員 3名（アメリカ2名、タイ1名）

提出書類 (1) 保証人と連署した願書

(2) 卒業証明書（写）

(3) 履歴書

(4) レポート（次項による）

提出レポート

一、アメリカ希望の場合

禅の国際化と私の役割 (2) 二一世紀の仏教と私の役割

二、タイ希望の場合

(1) タイの仏教に学びたいこと (2) 未来社会の仏教と私の役割

希望国の中からいずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五〜一〇枚

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

on their meals. The way of administering Zenkoji through close cooperation between the temple and the supporters is widely appreciated, as a good example of the administration of temples, not only in Japan but in overseas countries as well. As a matter of fact, I am invited to, and I have decided to attend to make a speech at, the 24th Buddhism Seminar (with the theme, "Buddhism and Asian Societies - (Religious Groups and Messages)" to be held in early December this year at Collège de France, Paris.

Zenkoji flourishes under the protection of Fudōmyōō (*Acala*, the God of Fire), but has not so far had the *Acala's* messengers, *Kongala* Child and *Seitaka* Child. The time at last has come to install the two Children in the Temple, and a Buddhist ceremony on the consecration of the two images is going to be held on November 28, 1987. Greater protection of Fudōmyōō will be on the future of Zenkoji.

The readers are encouraged to have further expectation and support.

one each to (Thailand and India, and...) Thailand and India, and one Chinese student to Komazawa University, Japan, for study under the scholarship. A total of 11 priests were awarded the scholarship in the three stages. The priests for the scholarship in the fourth stage are already awarded and in preparation for the time to leave Japan.

With the foundation of the Scholarship Society almost firmly set up for domestic administration, I visited India in March, the United States of America in June, and Thailand in September, in order to pay homage to those host people who have accepted the Scholarship priests from Japan, to ask their further long-lasting support, and to encourage the Scholarship priests studying there. Happily enough, and to our great gratitude, all the host people promised us their support with a good grace.

As a project of a temple, this Zenkoji Scholarship project is really extraordinary. For the administration of this big project, I have entreated the supporters of the Temple out of my excruciating mind, "Please save one mouthful of rice at each of your meals, to propagate Buddhism". My entreaty has been responded to by the pious supporters, who have cut down

## PREFACE

Rev. Takeshi Kuroda  
Chief Director  
Zenkoji

Starting from scratch 18 years ago, Zenkoji has grown up to a noted temple in Yokohama.

The favorable growth of the Temple has been owing wholly to the merciful protection of Buddha and the earnest support of the buddhist families and devotees holding close ties with the Temple. As the *Jushoku* of Zenkoji, I have been deeply grateful for thier valuable support. In token of the gratitude and in commemoration of the 15th anniversary of the Temple, the Zenkoji Scholarship Society for Priestly Study Abroad was established on January 15, 1984 to yearly send some priests to foreign countries for study there, with the view to cultivate men of ability who may contribute to the promotion of buddhism as well as to the progress of mankind and world peace. In the first stage, 2 priests were given opportunities to study in Thailand; in the second stage, 2 priests went to the United States and one each to (oneeachto) India and Sri Lauka: and in the third stage too priests to the United Stats and

▼「成寿」も第8号を刊行することができました。本号の為に、東京大学教授の鎌田茂雄先生に玉稿をお願いしましたところ、ご多忙の中を快よくお引き受け下さり、感謝にたえません。

▼五月の不動明王大祭の折、お話をしていたいただいた遠藤太禅老師は遠く会津よりお出掛けくださいました。が、その折の法話を載せてあります。ご老師の益々の法躰堅固をお祈りします。

▼今年の住職の海外日程は、三月のインドを皮切りに、実に多忙を極めました。六月にニューヨークのゼンマウンティン・モナストリイとゼン・コミュニティオブニューヨーク

に表敬訪問。九月にはタイ・ワットパクナム拝登。ひき続き十月にも小谷氏祝賀の為渡タイと、海外留学僧派遣育英会の基礎固めに各地を回りました。今後更に充実した受け入れの要請をすすめて行く考えです。

▼海外留学僧からのレポートが続々届けられています。多少頁数がふえましたが、前回、前々回とアメリカの報告を下さった河内義宣師とはまた、別の角度から見たアメリカの禅について、島崎師のレポートの全文を掲載しました。はじめて接する異国の禅に対する率直な私見に、読者の皆さま方の忌憚ないご意見とお導きを頂戴したいと思います。

▼十一月二十八日、念願の不動明王の眷属である矜羯羅・制吒迦の二童

子が、めでたく完成のはこびとなり、開眼法要が営まれました。大仏師錦戸新観先生のご臨席を賜わり、導師は本寺光真寺の黒田俊雄老師が務められました。

▼上智大学アジア文化研究所とフランスのパリ第七大学主催による第二回日仏セミナーが、十二月八日、パリ第一大学に於て開催されます。学会出席の要請を受けた当山住職は、「新しい寺院経営を求めて」というテーマで発表します。詳細については次号でお伝えする予定です。(小)

成寿 第八号

昭和六十二年十二月一日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野町一六〇四

電話 〇四五(八四五)一三七一

印刷所 神奈川新聞社出版局

# 縁生かんのん

たつた一度の出会いを  
大事にしよう

逢つた時が別れと知れば

出会いの不思議を大事に思う

縁なければ

永遠に逢い得ぬものを

友人となり仇となるとも

出会いの縁は

観音さまは知っています

四十億もの人の世に

たつた一度でも

出会いの人の誰であろうと

胸にきざみ大切にしよう

唯一度の人生のために

(遠藤太禅「観世音声を限りに」から)





横濱善光寺